梶本北民編

ブラジル季寄せ

日伯毎日新聞社

はしがき

歳時記はもと中国の昔、まつりごとなどの一年中の行事や故実を記録した書物であるが、ブラジルにもこれにやや類似の、もとは定本であったが今では年刊のアルマナッキと称する暦書がある。

俳句仲間の親しむ現在の日本の歳時記は、いわゆる俳句歳時記であって特殊のものであるが季寄せはこの歳時記に盛られた季語を分類し、簡単な解説や例句を載せ、手軽に句会や吟行に携帯されるように編纂された、いわばミニ歳時記とでもいうようなものである。

従来ブラジルの俳人は母国既刊のものを頼りとして来たのであるが、それを播く毎にブラジル独特の俳句歳時記があればと思うのは私ばかりではないように思う。とはいうもののブラジル歳時記の編纂は容易な仕事ではない。その内容には赤道から南回帰線をはるかに越える大陸の広大な地理と、それにともなう複雑な時候、天文や動植物があり、その上に世界各国よりの移民によって構成されつつある新しい民族と、それらの各人種が持ち寄っている、民族的な風習行事などが混然としているからである。その一部分にすぎない複雑な一例を、日頃身近なサンパウロ市付近の植物にひろって見ると、仏桑花（イビスコ）、花ベージョ、緋衣草（サルビア）、松葉牡丹（オンゼオーラ）、狸々花（ピッコ・デ・パパガイオ）、アンツーリヨ、極楽鳥花（ストレレチア）などは一年中花を開き、印度ソケイ（ブルメリア）、ジャスミン、ブーゲンベリアなどは、特に初冬から春の終りまで咲き盛るといった有様で（オ・エスタード紙農業附録による）これを歳時記の上に、季節的に地理的に的確に分類することは容易で

はない。したがって、ここに採録されたブラジル季題の中には、なおその修正をまぬがれぬものも多々あるように思う。

将来このような種々の問題を解決し、学問的な〝ブラジル俳句歳時記〟が出版されるなれば一歩を進めて季題、季語にはポ語訳も附し、動植物などはカラー写真を挿入し、目で見て確認し楽しめるようなものが出来ればと思う。それによって俳句作者に便宜であるばかりでなく、一般的にも又母国の人々にも、ブラジルをより深く認識していただくためにもと愚考する次第である。

拙著〝ブラジル季寄せ〟が、その過渡的な第一歩を踏みだした試みの一つとして、読者諸賢の共鳴を得れば幸である。

梶本北民

凡例

一、ブラジルの四季は、首都ブラジリアを基準として、次のようになっている。

夏は十二月二十一日より秋分の三月二十日まで。
秋は三月二十日より冬至の六月二十一日まで、
冬は六月二十一日より春分の九月二十二日まで、
春は九月二十二日より夏至の十二月二十一日まで。

一、作句上の四季区分は二十四節気にもとづきサンパウロ市を基準に
夏は十一月、十二月、一月（立夏十一月八日頃）、
秋は二月、三月、四月（立秋二月五日頃）、

冬は五月、六月、七月（立冬五月六日頃）、
春は八月、九月、十月（立春八月八日頃）となっている。

一、季題の配列は、四季を追い、年始の部（夏）を巻頭に、秋、冬、春、夏の順とした。

一、季題の分類は、時候、天文、地理、動物、植物、人事の順にできるだけ関連季題は一カ所　にまとめることにした。

一、季題と傍題はゴジック体とし、その右側に附すべき「ふりがな」は「よみがな」とし、読みかえや、読みのわずらわしいと思われるもののみに、その下に括弧して入れた。「」内　は季題、季語に対する関連語であることを示し、「」（ゴジック体）を附したものは季語として今後なお実作の上に、研究を要すると思われるものを示した。また索引に☆を附し　たものはブラジル季題であることを示す。

「例句は念腹先生の作品を主とし、念腹選になる木蔭雑詠選集を根幹に、ブラジル俳句集、パウリスタ俳句集、パウリスタ俳壇入選句並にホトトギス雑詠選集などより、地方色豊かな土着性に富んでいると思われる作品を選んだ。したがって日毎紙上に例句として採録したものをも、やむをえず割愛することにした。

一、季題があって例句の採録されていないものの大部分は、実作を試みながらも念腹選として　紙上公表に至らなかったためであり、またブラジルの季語として、実作に用うべきである　と思われるものは、参考までに採録した。

一、季題の解説は、出来る限り簡単にと心がけたため、その意を得ないものもあると思われる　が、その場合は日本の歳時記や木蔭誌など

を参照の上理解されたい。

一、季題解説末尾の括弧内は、木蔭誌上其の他に、その季語に関する研究及び文章を発表した　執筆者の俳号である。（文責編者）

一、仮名づかいは新旧混用の煩しさを考慮し、例句もふくめて、すべて新仮名づかいとし、伯国　語並に外来語の結尾のヤはアに統一し、ヅはバを用いることにした。またブラジル語や外来語の地方訛りやコロニア化したもの、例えば〝アマゾン〟や〝マット〟〝サイロ〟などと普通用いられているものを〝アマゾニア〟〝マッタ〟　シイロ〟の如くに及ばずながら正則を旨としたつもりである。

目　　次

はしがき
凡　例
年　始　一月
―時候―
一月
新年
　年の始。新玉の年。
　年迎う。年明く。
去年今年　去年。今年。旧年
正月

元朝　元旦。大旦。歳旦。・・
元日・……
二日　二日正月。……・
三ガ日　三日正月。：
六日　飾納め。飾り焚く。

天文
初明り。初朝。
初日　初日の出。初日影
初空

動物
初鶏
嫁が君

人事
若水　若井。初水
乗初
初詣
初ミサ
四方拝
年賀　年始。回礼。年札。
御慶
礼者　門札。門礼者。

年玉　お年玉。
賀状
初便り
初暦　フォリーニア。
初竈
寝正月
大服
屠蘇
年酒
雑煮
飾　お節。
鏡餅　御鏡。お重ね。
福引　宝引
歌留多
双六
笑初
泣初
初写真
掃初
書初
読初
仕事始　事務始。
初原稿

初刷

鍬始　鋤始。

縫初　初針。

売初　買。

初荷

初湯　初風呂。

枕初　結い初。

初髪

初鏡

稽古始　初稽古。

謡初　初謡。

初釜

弾初　初弾。

初句会

初夢

騎初　騎馬始。

弓始

初漁　初網。初釣。漁始。

初旅

破魔弓　はま矢。

サント・レイス☆

秋
二　月三　月四　月
　時候
秋。秋の宿。秋の人。
立秋
二月
初秋　新秋
残暑　秋暑し。残る暑さ。……
秋めく
新涼　秋涼し。秋涼。
三月
雨季上る
秋の夜　秋の宵。夜半の秋。
夜長　長き夜。
秋彼岸　。
爽やか　さやけし。……
冷やか　秋冷。……
……四月　仲秋。
秋の日　秋日。秋の入日。
秋の暮　秋の夕暮。秋の夕。
うそ寒む　やや寒。
朝寒　朝寒し。……

夜寒 ……
身に入む
露寒 ……
秋深し 深秋。秋さぶ。
行秋 秋惜しむ。……
暮の秋 秋の末。晩秋。 秋。秋果つ。秋の別れ。

天文
星月夜 ほしづくよ。星の夜
天の川
初嵐。
銀河。銀漢。……
稲妻 稲光。稲の漢。……
流星
野分 野わけ。……
三日月 新月。三日の月。……
夕月夜 宵月。夕月。……
露 露の袖。露の世。露の身。白露 。露の秋。

月
秋の月。月白。弦月。
月の秋。月夜。月の出。
月明。遅月。月の道。

弓張月。宿の月。庵の月。
夜々の月。
待宵　小望月。……
名月　満月。十五夜。明月。
望月。今日の月。月今宵。芋名月。
良夜　良宵。……
無月　……
雨月　……
宵闇　……
霧。　朝霧　夕霧。夜霧。霧の海。
霧笛。
鰯雲　鱗雲。鰯雲。……
秋晴　秋日和。……
秋高し　天高し。……
秋の空　秋天。秋空。……
秋の雲……
秋風　秋の風。……
秋の声　秋声
秋の雨
後の月
秋時雨
秋曇　…
秋早　…

秋の虹
秋夕立☆
秋の夕焼

地理
秋出水
花野
秋の潮
秋の海
秋の水
水澄む
秋の山
秋の野
秋の湖
秋の川
刈田
櫓田
秋の田

動物
蜩
秋の蝉
虫。

鈴虫

こうろぎ

ちちろ

蚯蚓鳴く

蓑虫

菜虫

いなご

ばった

蟷螂

芋虫　……▪

放屁虫　；

とんぼ

秋蚕

秋の蝶

秋蛍

秋の蝿

秋の蚊

蛇穴に入る

穴まどい

雁　雁渡る。落雁。

燕帰る

残る燕☆：

秋鯖　……

鰯

鮒

秋海棠

太刀魚　エスパーダ

ドラード☆……

パクー☆……

稲雀　……

渡り鳥　烏渡る

色鳥　秋の鳥

小鳥　小鳥来る

鶉　イナンブー

啄木鳥

鶴来る

ツカーノ☆

アララ☆

パパガイオ☆

ペリキット☆

馬肥ゆる　……

鹿

猪

水豚　☆

パッカ☆

クチア☆

秋鯖 …… 四七
鰯 [illegible]。秋鰯。鰯売。鰯舟 …… 四七
鱸 すずき釣。すずき網。すずき膾 …… 四七
太刀魚 エスハーダ …… 四七
ドラード☆ …… 四八
パクー☆ …… 四八
稲雀 …… 四八
渡り鳥 鳥渡る。 …… 四八
色鳥 秋の鳥。 …… 四九
小鳥 小鳥来る …… 四九
鶉 イナンブー。コドルナ。山鶉。片鶉。鶉の床。 …… 四九
啄木鳥 けらつつき。けらこだま。けら。 …… 五〇
鶴来る 鶴。鶴渡る。 …… 五〇
ツカーノ☆ 大嘴。アラサリー。 …… 五〇
アララ☆ 緑アララ。青黄アララ。青アララ …… 五一
パパガイオ☆ オーム。 …… 五一
ペリキット☆ インコ。 …… 五一
馬肥ゆる …… 五二
鹿 男鹿。小鹿。鹿の声。めざし。鹿笛 …… 五二
猪 野猪。のじし。 …… 五三
水豚☆ …… 五三
パッカ☆ …… 五三
クチア☆ …… 五四
栗鼠☆ …… 五四

— 植物 —

…… 五五
鳳仙花 つまくれない。つまべに。 …… 五五
花ベイジョ☆ …… 五五
白粉の花 おしろい。 …… 五五
朝顔 牽牛花。 …… 五五
蓼の花 桜たで。穂たで。赤のまんま。犬たで。 …… 五六
萩 小萩。山萩。野萩。萩散る。こぼれ萩。乱れ萩。萩原。萩の戸。萩の宿。萩の下。萩見。 …… 五六
女郎花 おみなめし。 …… 五六
男郎花 おとこめし。 …… 五七
桔梗 きちかう。 …… 五七
撫子 河原撫子。やまとなでしこ。 …… 五七
秋海棠 …… 五七
菊 初菊。白菊。黄菊。一重菊。八重菊。大菊。百菊。小菊。菊日和。菊畑。菊の宿。作り菊。菊作り。 …… 五七
野菊 嫁菜の花。紺菊。野路菊。油菊。 …… 五八
枕菊☆ マルセーラ …… 五八
蘭 蘭の秋。秋蘭。蘭の花。蘭の香。 …… 五八
竜胆 …… 五八
コスモス 秋桜。 …… 五九
曼珠沙華 彼岸花。 …… 六〇
カンナ …… 六〇
花ジンジアー☆ ナポレオン …… 六〇
鶏頭 鶏頭花。 …… 六〇
葉鶏頭 雁来紅。かまつか。 …… 六一
草の花 草花。千草の花。 …… 六一
露草 月草。ほたる草。ぼおしぐさ。 …… 六一

芒 パンパス グラス。パンパ芒。鬼芒。芒野。芒原。芒の穂。穂芒。尾花。 …… 六二
秋草 色草。千草。秋の草。 …… 六二
泡立草☆ 秋の麒麟草。金紺草。 …… 六二
草棉 棉吹く。棉。棉の秋。 …… 六二
蒲の穂絮 …… 六三
草の穂 穂草。草のわた。 …… 六三
草の実 カラピッショ。 …… 六三
藪虱 草じらみ。 …… 六四
桐一葉 一葉。一葉の秋。 …… 六四
木槿 きはちす。花木槿。木槿垣。 …… 六四
梅もどき …… 六四
芭蕉 芭蕉葉。芭蕉林。 …… 六五
旅人木☆ …… 六五
パイネイラ☆ …… 六五
クワレズマ☆ ジャカチロン …… 六六
野牡丹☆ …… 六六
紫紺野牡丹☆ …… 六七
歓喜樹☆ アレルイア。 …… 六七
火焔樹☆ …… 六七
紅葉 夕紅葉。照葉。雑木紅葉。黄葉。 …… 六八
柿紅葉 …… 六八
銀杏黄葉 …… 六八
蔦紅葉 錦蔦。 …… 六九
草紅葉 草の紅葉。草の錦。たで紅葉。 …… 六九
マモナ紅葉☆ …… 六九
藤豆 千石豆。八升豆。 …… 六九
虹豆 十六虹豆。十八虹豆。 …… 六九
小豆 …… 六九
大豆 大豆引く。 …… 七〇
落花生 南京豆。唐人豆。 …… 七〇
唐辛 蕃椒。唐辛子。 …… 七〇
秋茄子 あきなすび。 …… 七一
紫蘇の実 …… 七一
生姜 はじかみ。新しょうが。古しょうが。 …… 七一
貝割菜 二葉菜。 …… 七一
胡麻 胡麻刈る。胡麻干。胡麻叩。 …… 七一
玉蜀黍 ミーリョ。唐黍。ナンバン。もろこし。 …… 七二
南瓜 ぼうぶら。唐茄。 …… 七二
キアボ☆ キンゴンボ。オクラ。 …… 七二
草梅☆ アゼジンニア。 …… 七三
マシシエ☆ 隼人瓜。シュシュ。 …… 七三
蕎麦の花 花蕎麦。 …… 七三
蕎麦 …… 七三
芋 里芋。八頭。親芋。子芋。芋の秋。芋の露。芋畑。 …… 七四
馬鈴薯 ばれいしょ。じゃがたらいも。 …… 七四
甘藷 さつまいも。りゅうきゅういも。からいも。 …… 七四
自然薯 とろろいも。やまいも。じねんじょ。つくねいも。 …… 七四
零余子 むかご。 …… 七五
稲の花 …… 七五
早稲 早稲田。早稲刈。 …… 七五
稲 稲葉。初穂。稲穂。稲の秋。稲田。 …… 七五

陸稲 …… 七六
荔枝 蔓れいし。錦れいし。苦瓜。 …… 七六
胡椒☆ …… 七六
木蘭の花☆ …… 七六
茗荷の花 花茗荷。 …… 七七
間引菜 抜菜。搖菜。小菜。汁。小菜。 …… 七七
菌 西洋茸。茸。たけ。毒茸。椰子茸。 …… 七七
秋わらび☆ …… 七七
煙草の花 花煙草。 …… 七七
柿 渋柿。甘柿。豆柿。柿の秋。柿店。 …… 七七
熟柿 …… 七七
桃 …… 七七
葡萄 葡萄園。葡萄棚。 …… 七七
林檎 …… 七七
梨 ありのみ。ベーラ。 …… 八〇
蜜柑 青蜜柑。蜜柑山。 …… 八〇
朱欒 うちむらさき。文旦。 …… 八〇
金柑 …… 八〇

仏手柑 …… 八一
柚子 …… 八一
石榴 みざくろ。 …… 八一
無花果 …… 八一
茱萸 あきぐみ。 …… 八一
コンデ☆仏頂果。 …… 八二
アバカテ☆牛酪果。 …… 八二
ゴヤバ☆ …… 八二
カンブシー☆ …… 八三
ピニヨン☆松の実。 …… 八四
栗 栗拾い。落栗。栗山。栗林。毬栗。 …… 八四
団栗 くぬぎの実。 …… 八四
梅檀の実☆金鈴子。おうちの実。 …… 八五
鈴懸の実☆プラタナスの実。 …… 八五
新松子 青松かき。 …… 八五
枸杞の実 …… 八三
珈琲熟る☆珈琲の実。 …… 八三
胡桃 …… 八四

木の実 木の実落つ。木の実拾う。木の実酒。きのみ。 …… 八五
種茄子 …… 八六
瓢 瓠。ひさご。青ふくべ。 …… 八六
糸瓜 長糸瓜。糸瓜棚。 …… 八六
烏瓜 …… 八六
アロエー☆バボーザの花。花アロエー。 …… 八七
鬼灯 …… 八七
神父のふぐり☆風船唐橋。草バロン。 …… 八七
ジュアー☆狐ジュアー。 …… 八七
蘆 よし。あし原。 …… 八八
萱 サッペー。 …… 八八
残菊 残る菊。十日の菊。 …… 八八
玄圃梨☆ …… 八八
蔦 蔦かずら。錦蔦。 …… 八九
穭 …… 八九
落穂 落穂拾い。 …… 八九

秋の芽 秋芽立つ。 …… 八九
竹の春 …… 八九
破芭蕉 …… 九〇
敗荷 破れ蓮。はいか。 …… 九〇
末枯 …… 九〇
柳散る 散る柳。 …… 九〇
竹の実 …… 九〇

—人事—

入学 新入生。 …… 九一
入営☆ …… 九一
パウ・デ・アララ☆ …… 九一
硯洗 …… 九一
星祭 乗牛。織女。七夕祭。星迎。二ツ星。夫婦星。産星。織姫。星の祭。星の別。星今宵。星の手向。かささぎの橋。星の夜。 …… 九二
魂祭 精霊祭。棚経。盂祭。 …… 九二

走馬燈 廻り燈籠。 …… 九二
踊 盆踊。踊場。踊の輪。踊子。踊手。踊浴衣。踊笠。踊見。踊唄。踊太鼓。 …… 九二
相撲 すまい。角力。相撲取。草相撲。相撲場。上俵。横綱。大関。関取。 …… 九三
運動会 …… 九四
新豆腐 …… 九四
とろろ汁 そばとろ。 …… 九四
大根蒔く だいこまく。 …… 九四
新渋 しぼしぶ。古渋。 …… 九四
渋取 渋掬。 …… 九四
懸煙草 煙草刈る。若煙草。新煙草。煙草干す。新フーモ。 …… 九五
秋の燈 燈火親し。秋灯。秋燈。 …… 九五
夜学 夜学子。 …… 九五
夜業 …… 九六
袋継ぎ☆袋縫ひ。サッコ継ぎ。 …… 九六
山立て☆ …… 九六

夜なべ 夜仕事。 …… 九七
夜食 …… 九七
月見 観月。月の友。月の宴。月の客。 …… 九七
枝豆 月見豆。 …… 九七
衣被 …… 九八
パモーニア☆パモネイロ。 …… 九八
芋茎 芋幹。ずいき汁。 …… 九八
秋の蚊帳 …… 九八
秋扇 捨扇。忘扇。扇置く。 …… 九九
秋団扇 捨団扇。 …… 九九
雁瘡 …… 九九
根釣 岸釣。 …… 九九
竹伐る …… 九九
茸狩 茸とり。きのこがり。 …… 一〇〇
新米 今年米。 …… 一〇〇
葡萄祭☆葡萄酒。 …… 一〇〇
新酒 今年酒。新走。 …… 一〇一
古酒 …… 一〇一

濁酒　どびろく。もろみ。……一〇一
案山子　……一〇一
鳴子　引板。いた。……一〇二
鳥威　威銃。……一〇二
鹿垣　猪垣。……一〇二
鹿火屋　鹿火屋守。……一〇三
豊年　出来秋。豊の秋。……一〇三
凶作　不作。……一〇三
毛見　検見。毛見の衆。……一〇三
吊し柿　干柿　串柿　甘柿。……一〇四
松手入　……一〇四
菊人形　……一〇四
菊膾　……一〇四
菊枕　……一〇四
温め酒　ぬくめ酒。酒温む。……一〇五
柿祭☆　……一〇五
砧　衣打つ。夕きぬた。小夜きぬた。遠きぬた。きぬた盤。……一〇五
初猟　初狩。……一〇五
小鳥網　霞網。鳥屋師。小鳥狩。……一〇六
囮　囮籠。囮守。囮罠。囮笛。……一〇六
牛蒡引く　……一〇六
雫余子飯　むかごめし。……一〇六
薬掘る　薬草採。……一〇六
綿取　綿摘。……一〇七
新綿　今年綿。古綿。……一〇七
新蕎麦　走蕎麦。……一〇七
秋耕　……一〇八
萱刈る　……一〇八
ラミー刈る☆　……一〇八
稲刈　稲車。稲刈機。陸稲刈。晩稲刈。田刈。刈稲。……一〇八
稲扱　稲扱機。稲叩き。……一〇九
籾　籾干。籾殻。……一〇九
新藁　今年藁。……一〇九
藁塚　……一一〇
アラブーカ☆　……一一〇
冬支度　冬用意。……一一〇
種採　……一一〇
猿酒　……一一一
柚味噌　ゆずみそ。柚釜。……一一一
カルナバル☆　謝肉祭。モモ王。レチロ。……一一一
聖灰祭☆　灰の日。灰の水曜。灰十字。……一一二
四旬節☆　受難節。……一一二
雛　雛祭。雛人形。……一一三
四月馬鹿　万愚節。……一一三
潅仏　甘茶。潅仏会。仏生会。花まつり。花御堂。……一一三
虚子忌　椿寿忌。……一一四
聖週間　セマナ・サンタ。洗足台。……一一四
枝の日曜☆　枝の日。パイションの日。……一一四
受難日　受難劇。受難歌。聖金祭。絶食日。……一一四
ユダ打つ☆　ユダ人形。ユダ焼く。パスコア。……一一五
復活祭　復活の卵。……一一五
土人の日☆　……一一五
チラデンテス忌☆　……一一六

天皇の日　天皇誕生日。……一一六
冬　五月　六月　七月　……一一七
— 時候 —　……一一八
冬　三冬。九冬。冬の宿。冬の庭。冬の町。冬沼。……一一八
立冬　今朝の冬。冬立つ。冬に入る。冬来る。……一一八
五月☆　マリア月。……一一八
冬めく　……一一九
乾季☆　冬草。乾季塊。乾季風。乾季宿。牧乾季。……一一九
冬の朝　……一二〇
小春　小春日和。小春日。……一二〇
冬暖　冬ぬくし。暖冬。寒ぬくし。とうだん。……一二〇
六月　……一二一
冬の日　冬日。冬日向。……一二一
寒さ　……一二一
冷たし　底冷え。……一二二
霜夜　……一二二
冬の夜　夜半の冬。寒夜。冬夜。冬の宵。……一二二
冬至　冬至粥。……一二三
短日　日短。暮早し。暮易し。……一二三
日脚伸ぶ　……一二三
七月　……一二四
凍る　いてる。凍土。……一二四
冴ゆる　風冴ゆる。鐘冴ゆる。月冴ゆる。……一二五
三寒四温　四温。……一二五
春待つ　待春。……一二五
春隣　春近し。……一二五
— 天文 —　……一二七
冬日和　冬晴。冬うらら。……一二七
冬の空　寒天。寒空。……一二七
冬の月　冬三日月。冬満月。……一二七
寒月　寒満月。寒三日月。……一二七
冬の雲　凍雲。冬雲。寒雲。……一二七
冬霞　冬のもや。……一二七
冬の雨　……一二八
初時雨　……一二八
時雨　朝時雨。夕時雨。小夜時雨。村時雨。片時雨。……一二八
南風☆　みなみ。なんぷう。寒風。パンペイロ。南吹く。冬の風。大南風。トルメンタ。……一二九
寒波☆　からつかぜ。……一二九
空風　木枯。……一三〇
凩　……一三〇
虎落笛　……一三〇
鎌鼬　鎌風。……一三〇
初霜　……一三一
霜　霜解。霜晴。大霜。深霜。朝霜。夜の霜。霜の声。霜凪。霜雫。……一三一

凍蝶……一四四
冬の蜂……一四四
冬の蠅……一四四
糠ダニ☆ムクイン……一四四
砂蚤☆ピショ・ド・ペ……一四四

―植物―

……一四四
蟹仙人掌☆シャコサボテン。五月の花。フロール・デ・マイオ　フロール・デ・セ……一四四
蔓サンジョン☆……一四四
ポインセチア☆猩々木。猩々花。……一四四
スイナン☆……一四四
茶の花……一四四
枇杷の花……一四五
寒菊　冬菊。……一四五
冬薔薇　寒薔薇。冬そうび。……一四五
寒椿　冬椿。……一四五
佗助……一四五
寒木瓜……一四五
水仙……一四五
千両……一四五
万両……一四五
冬の蘭☆寒の蘭。帰り咲き。忘れ咲き。狂い花。狂い咲き。……一四五
帰り花……一四五
パイナ☆パイナ吹く。木綿。……一四五
ピタンガ☆……一四五
ジャトバ☆……一四五
冬苺　寒苺。……一四五
マンジョカ☆木薯。新木薯。……一四五
葱　根深。ひともじ。……一四五
大根……一四五
冬菜　冬菜畑。……一四五
白菜……一四五
人参……一四五
蕪　かぶ。蔓菁。……一四五
麦の芽……一四五
冬の草　冬草。……一四五
脂肪草☆あぶら草。……一四五
石蕗　あおき汁。……一四五
冬紅葉　残る紅葉。……一四五
紅葉散る　散紅葉。……一四五
木の葉　木の葉雨。木の葉散る。……一四五
枯葉……一四五
落葉　落葉焚。落葉竹。……一四五
銀杏落葉……一四五
柿落葉……一四五
冬木　冬木道。冬木宿。寒木。……一四五
冬木立……一四五
枯木　枯木宿。……一四五
枯木立　寒林。……一四五
霜枯……一四五
冬枯……一四五

枯柳……一四五
枯桑　桑枯り。……一四五
枯茨……一四五
枯芝……一四五
枯草　草枯。……一四五
枯蘆……一四五
枯蔓……一四五
枯蔦……一四五
枯尾花　枯芒。枯薄。……一四五
枯菊……一四五
枯芭蕉……一四五
枯蓮……一四五
枯芦……一四五
蒲枯る☆……一四五

―人事―

……一四五
労働祭　メーデー。……一四五
端午　鯉のぼり。大幟。武者人形。五月鯉。……一四五
奴隷の日☆……一四五
母の日　☆……一四五
兵隊の日☆……一四五
愛人の日☆　恋人の日。……一四五
聖体祭☆……一四五
移住祭☆　移民祭。移民の日。入植祭。……一四五
移民着く☆　移民。移民列車。新移民。移住。……一四五
ジュニナ祭☆……一四五
サンジョン祭☆　焚火祭。ヨハネ祭……一四五
サンペドロ祭☆　ペドロ祭。……一四五
神の旗☆　マストロ。ヨハネの旗。……一四五
ケルメッセ☆……一四五
花火　揚花火。仕掛花火。煙火。遠花火。昼花火。花火見。ボンバ。ブスカペー。……一四五
バロン☆火風船……一四五
圭石忌☆……一四五
瓢骨忌☆……一四五
山伐☆……一四五
トーラ出し☆トーラ曳く。……一四五
シイロ開く☆……一四五
フエイジョン打つ☆　豆を打つ。豆叩く。……一四五
マンジョカ掘る☆　木薯掘る。木薯引く。……一四五
木薯摺る☆……一四五
棉殻焼く☆　棉根抜く。……一四五
胡椒摘む☆……一四五
珈琲採り☆　珈琲摘み。珈琲もぎ。珈琲干す。……一四五
麭植う……一四五
甘蔗刈……一四五
蕎麦刈……一四五
蓮根掘る　蓮掘。……一四五
冬耕　冬田打つ。……一四五
寒肥……一四五
麦蒔……一四五
大根引く　だいこ引。……一四五
大根洗う……一四五
大根干す　懸大根。干大根。……一四五

切干 …… 一七四
浅漬 …… 一七四
沢庵漬く 大根漬ける。 …… 一七四
茎漬 茎の桶。茎の石。茎漬。茎の水。 …… 一七四
風呂吹 …… 一七四
雑炊 おじや。 …… 一七五
根深汁 葱汁。 …… 一七五
干菜 懸菜。吊菜。 …… 一七五
干菜湯 干菜風呂。 …… 一七五
納豆汁 …… 一七六
粕汁 酒の粕。 …… 一七六
闇汁 …… 一七六
のつぺい汁 のっぺ。 …… 一七六
鍋焼 芹焼。鍋焼うどん。 …… 一七六
牛鍋 すき焼。鋤焼。 …… 一七七
おでん おでん屋。関東煮。 …… 一七七
熱燗 …… 一七七
玉子酒 卵酒。 …… 一七八
焼藷 …… 一七八
湯豆腐 …… 一七八
シュラスコ☆ シュラスカリア。シュラスカーダ。 …… 一七九
薬喰 鹿売。 …… 一七九
山鯨 猪鍋。 …… 一八〇
煮凝 …… 一八〇
牡蛎飯 牡蛎雑炊。 …… 一八〇
柚湯 柚風呂。冬至湯。 …… 一八一
味噌搗 味噌作る。 …… 一八一
寒卵 …… 一八一
ケントン☆ 生姜酒。 …… 一八一
新マテ☆ 走りマテ。 …… 一八二
新ピンガ☆ …… 一八二
ピポカ☆ …… 一八二
木の葉髪 …… 一八二
息白し …… 一八三
悴かむ …… 一八三
胼 ひび薬。 …… 一八三
皸 あかがり。 …… 一八三
湯ざめ …… 一八四
霜消☆ …… 一八四
風邪 風邪薬。グリッペ。流感。はやり風邪。 …… 一八四
咳 しわぶき。 …… 一八四
嚏 …… 一八五
水洟 …… 一八五
寒紅 丑紅。 …… 一八五
凍死 …… 一八五
冬篭 …… 一八六
障子 …… 一八六
冬安居 雪安居。 …… 一八六
冬構 …… 一八六
寒燈 冬灯。冬の灯。 …… 一八七
冬休 …… 一八七
避寒 避寒宿。 …… 一八七
南窓塞ぐ☆ なんそうふさぐ。 …… 一八七
隙間風 …… 一八七

目貼 隙間張る。 …… 一八八
山視☆ …… 一八八
轉耕☆ 轉耕車。 …… 一八八
牛の旅☆ ボヤーダ。ボヤデイロ。牛の宿。 …… 一八九
竹瓮 …… 一九〇
狩 猟犬。猪狩。鹿狩。猟銃。狩舟。猟狩。 …… 一九〇
猟人 さつお …… 一九一
狩の宿 …… 一九一
狐罠 …… 一九一
兎狩 …… 一九一
寒釣 …… 一九一
炭 木炭。堅炭。 …… 一九二
消炭 …… 一九二
炭火 炭頭。いぶり炭。はね炭。 …… 一九二
炭竈 …… 一九二
炭焼 …… 一九二
炭袋 …… 一九二
炭売 炭買う。 …… 一九二
焚火 …… 一九四
榾 榾取。榾火。榾の宿。榾の主。 …… 一九四
アケセドール 煖房。煖ロ。ストーブ。スチーム。 …… 一九五
火桶 火鉢。 …… 一九五
懐炉 …… 一九五
湯婆 ゆたんぽ。 …… 一九五
湯気立 …… 一九六
綿 綿打。 …… 一九六
布団 干蒲団。羽蒲団。絹布団。藁布団。 …… 一九六
腰布団 …… 一九六
毛布 ケット。 …… 一九七
褞袍 丹前。 …… 一九七
ちゃんちゃんこ 袖無。 …… 一九七
毛衣 かわごろも。毛のパーラ。 …… 一九八
毛皮 毛皮売。 …… 一九八
重ね着 …… 一九八
着ぶくれ …… 一九八
冬服 …… 一九九
冬帽 防寒帽。 …… 一九九
頬被 …… 一九九
襟巻 首巻。カシコー。 …… 一九九
シャレ 肩掛。ショオル。 …… 二〇〇
股引 …… 二〇〇
外套 カザッコン。マント。オーバ。ポンチョ。 …… 二〇〇
懐手 …… 二〇〇
プローベル スエータ。ジャケツ。マーリヤ。 …… 二〇〇
日向ぼこり 日向ぼっこ。日向ぼこ。 …… 二〇一
毛糸編む …… 二〇一
霜除 …… 二〇二
フレーム 温床。 …… 二〇二
池普請 川普請。 …… 二〇二
火事 船火事。大火。小火。半焼。類焼。近火。遠火事。火事見舞。 …… 二〇二
火の番 夜廻り。夜警。火の見槽。夜番。 …… 二〇三
寒稽古 …… 二〇三

根木打……二〇三
竹馬……二〇三
手毬……二〇三
探梅……二〇四
雪見……二〇四
競馬……二〇四
春　八月　九月　十月……二〇五
立春……二〇六
八月……二〇六

―時候―……二〇六

早春……二〇六
春浅し……二〇七
冴返る……二〇七
春寒……二〇七
余寒……二〇七
九月……二〇七
啓蟄……二〇八
春めく……二〇八
春分……二〇八
暖か……二〇九
十月……二〇九
春の日……二〇九
日永……二〇九
麗か……二一〇
長閑……二一〇
春晩……二一〇
春昼……二一〇
春の宵……二一一
春の夜……二一一
春深し……二一一
夏近し……二一一
行春……二一一
暮の春……二一二
春惜しむ……二一二
春窮……二一二

―天文―……二一三

春雪……二一三
春の霜……二一三
別れ霜……二一三
初雷……二一三
春雷……二一三
春時雨……二一四

一番雨☆……二一四
春驟雨……二一四
春雨……二一四
花の雨……二一五
カジューの雨☆……二一五
春一番……二一五
西風吹く☆……二一五
霾る……二一六
春塵……二一六
東風……二一六
春風……二一六
貝寄風……二一七
春の雲……二一七
霞……二一七
陽炎……二一八
春の空……二一八
春の月……二一八
春の星……二一九
朧月……二一九
朧……二一九
春の虹……二一九
花曇……二一九
春光……二二〇
風光る……二二〇
蜃気楼……二二〇
春の霰……二二〇
春の露……二二〇
春の夕日……二二一
春の夕焼……二二一
春の闇……二二一
煙霊☆……二二一
氷解け……二二二

―地理―……二二三

焼野……二二三
焼山……二二三
春の山……二二三
山笑う……二二三
春の水……二二三
春の川……二二三
水温む……二二三
春泥……二二四
春田……二二四
春の野……二二四
春の海……二二四
春潮……二二五
春の波……二二五

―動物―……二二六

獺☆……二二六
猫の恋……二二六

子猫 猫の子。猫の親。……二二六
孕鹿 ……二二七
馬交る☆種驢馬。……二二七
仔馬 馬の子。孕馬。……二二七
落し角 ……二二七
田螺 田螺鳴く。田螺取。……二二七
蝌蚪 蛙の子。お玉杓子。……二二八
蛙 犬蛙。牛蛙。赤蛙。角蛙。昼蛙。夕蛙。遠蛙。雨蛙。……二二八
瀬の祭 ……二二八
亀鳴く ……二二九
蛇穴を出づ ……二二九
蜂鳥☆蜂雀。コリブリ。……二二九
麦鶉 ……二三〇
燕 つばくろ。つばくらめ。初燕。飛燕。燕来る。岩燕。……二三〇
百千鳥 ……二三〇
ベンテビー☆……二三〇
アラポンガ☆かじや鳥。……二三一

サビアー☆……二三一
タンガラー☆舞子鳥。……二三一
アズロン☆……二三一
地カナリオ☆山カナリオ。野カナリオ。……二三一
クリオー☆アビニアード。……二三一
孕雀 子持雀。春雀。……二三二
雀の子 子雀。親雀。……二三二
囀 ……二三二
鳥交る 鳥つるむ。鳥の恋。……二三二
鳥帰る 鳥雲に入る。鳥雲に。鳥曇。帰る鳥。小鳥引く。……二三四
引鴨 鴨帰る。帰る鴨。行く鴨。残る鴨。……二三四
巣立 巣立鳥。……二三四
古巣 ……二三五
鳥の巣 巣構え。巣組。巣づくり。鳶巣。巣ごもり。巣鳥。小鳥の巣。……二三五
雀の巣 ……二三五
鷲の巣 ……二三五
鷹の巣 ……二三六

鳩の巣 ……二三六
燕の巣 巣燕。……二三六
鰆 ……二三六
鱒 紅鱒 ……二三六
浅鯏 あさり汁。……二三六
桜貝 ……二三七
汐まねき ……二三七
海謄 雲丹。……二三七
蝶 白蝶。黄蝶。モルフォ蝶。蜆蝶。深山蝶。王蝶。蝶吹雪。……二三七
蚕 春蚕。蚕卵紙。蚕飼。掃立。飼屋。蚕棚。蚕室。捨蚕。蚕時。……二三七
虻 牛虻。花虻。……二三八
春の蠅 ……二三八
春の蚊 ……二三八
蠅生る ……二三九
蜂 蜜蜂。山蜂。熊蜂。足長蜂。穴蜂。土蜂。アフリカ蜂。……二三九
蜂の巣 ……二三九

―植物―

ものの芽 ……二四〇
草の芽 名草の芽。……二四〇
下萌 牧青む。草青む。土手青む。草萌。……二四〇
木の芽 きのめ。芽立ち。木の芽時。木の芽風。木の芽吹く。芽組む。木の芽雨。木の芽道。木の芽晴。……二四〇
蘗 ひこばえす。……二四一
種芋 芋種。芋の芽。……二四一
海苔 海苔搔。海苔採。新海苔。……二四一
芽柳。 柳の芽。芽ばり柳。……二四一
柳 ショロン。糸柳。青柳。川柳。門柳。遠柳。……二四一
柳絮 ……二四一
桑の芽 芽桑。……二四一
桑 ……二四一
桑の花 花桑。……二四一

薔薇の芽 茨の芽。野薔薇の芽。……二四二
蔦の芽 ……二四二
蔦若葉。……二四二
春の草 春草。芳草。草芳し。……二四二
若草 新草。……二四二
古草 ……二四四
草若葉 ……二四四
若芝 ……二四四
若緑 松の緑。緑立つ。若松。松の芯。……二四四
苜蓿 クローバ。……二四四
はこべ はこべら。……二四四
茅花 白茅。茅花野。……二四四
いぬふぐり ……二四五
母子草 はうこぐさ。……二四五
雛菊 デージー。延命菊。長命菊。……二四五
菫 スミレ草。花スミレ。三色スミレ。パンジー。……二四五
蒲公英 鼓草。……二四五
くろだね草☆ニゲラ……二四六

松虫草 ……二四六
桜草 ……二四六
シクラメン カガリ火草。……二四六
スイトピー ……二四六
フリージア 浅黄水仙。……二四七
金せん花 常春花。長春花。ときしらず。……二四七
勿忘草 ……二四七
暮鐘草☆サイア・ブランカ。……二四七
薊の花 きつねあざみ。野あざみ。花あざみ。……二四八
蓴生う ……二四八
水草生う みくさ生う。うきくさ生う。春の藻。……二四八
蘆の角 芦の芽。角組む芦。芦の錐。……二四八
青麦 麦青む。……二四八
ミーリョの芽☆玉蜀黍の芽。……二四九
茗荷竹 ……二四九
葱坊主 葱の花。葱の擬宝。……二四九
大根の花 花大根。種大根。……二四九
豆の花 蚕豆の花。豌豆の花。……二四九

虎杖 ……二五〇
べにいたどり。名月草。虎杖の芽。
アルカショフラ☆ ……二五〇
芥菜 ……二五〇
芹 ……二五〇
芹摘。
薇 ……二五〇
蕨 ……二五〇
早蕨。干蕨。蕨飯。
蓬 ……二五一
もぐさ。餅草。蓬摘。
春菊 ……二五一
菊菜。しんぎく。
菠薐草 ……二五一
韮 ……二五一
ふたもじ。
蒜 ……二五一
アーリョ。
独活 ……二五一
芽独活。山独活。もやし独活。独活を掘る。
竹の秋 ……二五二
竹秋。
枸杞 ……二五二
くこ飯。くこ茶。くこ摘む。くこの芽。
接骨木の花 ……二五二
梅 ……二五二
野梅。早梅。白梅。紅梅。梅が香。梅の花。
桃の花 ……二五三
緋桃。桃花。桃咲く。白桃。桃畑。桃園。桃の村。
梨の花 ……二五三
杏の花 ……二五三
からももの花。
林檎の花 ……二五四
花りんご。
花珈琲☆ ……二五四
珈琲の花。
花マモン☆ ……二五四
マモンの花。
カジューの花☆ ……二五四
花ビキー☆ ……二五五
花アバカテ☆ ……二五五
花マンガ☆ ……二五五
マンガの花。マンガ咲く。
マテの花☆ ……二五六
木葡萄☆ ……二五六
ジャボチカバ。
カカウ☆ ……二五六
桜 ……二五七
花。山桜。八重桜。遅桜。朝桜。夕桜。夜桜。親桜。
松の花 ……二五七
松の芯。松花粉。
躑躅 ……二五七
やまつつじ。きりしま。
猫柳 ……二五八
椿 ……二五八
カメリア。玉椿。山椿。やぶ椿。白椿。乙女椿。八重椿。落椿。
石南花 ……二五八
海業 ……二五八
花かいどう。
ライラック ……二五八
リラの花。紫丁香花。
小米花 ……二五九
雪柳。小米桜。蝦花。
小紛団の花 ……二五九
こでまり。
沈丁花 ……二五九
丁子。沈丁。
木蓮 ……二五九
白木蓮。紫木蓮。
木瓜の花 ……二五九
緋木瓜。更紗木瓜。白木瓜。
黄楊の花 ……二五九
からたちの花 ……二六〇
枳殻の花。
木苺の花 ……二六〇
牛蹄花☆ ……二六〇
牛の爪花。
花リッシア☆ ……二六〇
マナカ☆ ……二六一
蕃木利。
藤 ……二六一
藤の花。藤棚。藤所。藤の雨。
ブリマベーラ☆ ……二六一
ブーゲンベリア。茂かずら。
やもめかずら☆ ……二六二
金鳳樹☆ ……二六二
カンジャラナ☆ ……二六二
ジャカランダ☆ ……二六三
黄イペー。イペの花。イペー散る。イペ落花。
花イペー☆ ……二六三
イペ・ロショ。白イペ。山イペ。イペー咲く。イペ大樹。
春の蘭☆ ……二六四
紅千鳥☆ ……二六四
君子蘭☆ ……二六四
畑打つ ……二六七
種物 ……二六七
種物屋。種売。花種。物種。種袋。
棉の種☆ ……二六七
棉種。
種選 ……二六七
たねよる。
苗床 ……二六八
種床。
苗売 ……二六八
苗札 ……二六八
木の実植う ……二六八
木蘭植う☆ ……二六八
マンジョカ植う。
珈琲植う☆ ……二六九
苗木植う ……二六九
植林。
菊根分 ……二六九
菊植う。菊分つ。菊作る。
花種蒔く ……二七〇
南瓜蒔く ……二七〇
人参蒔く ……二七〇
ミーリョ蒔く☆ ……二七〇
唐黍蒔く。
種蒔 ……二七〇
種おろし。初蒔く。物種蒔く。種蒔機。
接木 ……二七一
接穂。だい木。
牧手入れ☆ ……二七一
馬櫪直す。
種案山子 ……二七三
茶摘 ……二七三
茶摘女。茶摘唄。茶山。茶園。
製茶 ……二七三
焙炉。
桑摘 ……二七三
桑籠。桑車。
徒枝欠き☆ ……二七三
徒芽欠き。
山崩す☆ ……二七三
山散す。
霜害 ……二七三
霜くすべ。
野遊 ……二七三
ピクニック。
摘草 ……二七四
草摘む。
飢挿す ……二七四
磯遊び ……二七四
磯菜摘。
潮干 ……二七四
潮干狩。干潟。
凧 ……二七四
奴凧。紙鳶。いかのぼり。いか。はた。奴凧。
風車 ……二七五
風車売。
風船 ……二七五
風船売。
石鹸玉 ……二七五
たまや。ふらここ。ぶらんこ。
鞦韆 ……二七五
半仙戯。秋千。

——人事——

……二六五
野焼く ……二六五
野火。草焼く。土手焼く。芝を焼く。畦を焼く。
山焼く ……二六五
山火。火道切る。樹海焼く。
麦踏 ……二六六
耕 ……二六六
耕人。耕馬。耕牛。耕車。

遠足……二七六
鶏合　闘鶏。鶏馬。負鶏。……二七六
闘牛　草闘牛。……二七六
野犬狩☆……二七六
田螺和　田螺汁。……二七七
田楽　木の芽田楽。……二七七
木の芽和　このめあえ。……二七七
菜飯……二七七
目刺　目刺焼く。……二七七
干鱈　棒鱈。ほしだら。……二七八
草餅　蓬餅。母子餅。……二七八
桜餅……二七八
春の風邪……二七八
種痘　植疱瘡。……二七八
踏青　青き踏む。……二七九
目貼剝ぐ……二七九
爐塞　炉の名残。春の炉。……二七九
春炬燵☆……二七九
垣繕う……二七九
屋根替　葺替。……二八〇
朝寝　大朝寝。……二八〇
春眠　春睡。……二八〇
春愁……二八一
春燈　春の燈。春灯。……二八一
猟名残……二八一
春の服……二八二
春日傘……二八二
父の日……二八二
みずほ忌☆　穂積忌。……二八二
牧夫祭☆　ロデイオ。トウラーグ。ペオン祭。……二八二
独立祭☆……二八三
子規忌　糸瓜忌。獺祭忌。……二八三
樹木の日☆　樹木祭。植樹祭。……二八三
黒母の日☆……二八四
牛馬市☆……二八四
新農年☆……二八四
作地割☆……二八四
素十忌☆……二八四
動物の日☆　犬の日。……二八五
小鳥の日☆……二八五
海の日☆……二八五
小供の日☆……二八五
先生の日☆……二八五
念腹忌☆……二八五

夏　十一月　十二月

……二八六

＝時候＝

……二八七
夏　島の夏。夏の寺。船の夏。……二八七
立夏　夏立つ。夏に入る。夏来る。……二八七
十一月……二八七
初夏　はつなつ。……二八七
夏めく……二八八
薄暑……二八八
麦の秋　麦秋。ばくしゅう。……二八八
十二月……二八八
短夜　明易し。夏の朝。……二八九
雨季☆　雨季に入る。雨季長し。……二八九
梅雨……二八九
夏至……二九〇
師走……二九〇
年の暮　年末。歳末。歳晩。年暮るる。年の瀬。……二九〇
年の内　年内。……二九一
行年　年惜む。……二九一
大晦日　大年。おおつごもり。……二九一
除夜　年の夜。……二九一
暑さ……二九一
涼し　朝涼。夕涼。晩涼。夜涼。涼風。……二九二
露涼し　夏の露。……二九二
夏の夕　夏夕。夏の暮。……二九二
夏の夜……二九三
燈涼し　夏の燈。……二九三
盛夏……二九三
極暑　大暑。酷暑。……二九三
秋近し　秋を待つ。秋隣。……二九三
夜の秋……二九三
晩夏　夏深し。……二九四
ピラセマ☆……二九四

＝天文＝

……二九五
青嵐……二九五
風薫る　薫風。……二九五
雹　氷雨。……二九五
夏雲　夏の雲。……二九五
雲の峰　入道雲。……二九六
雷　らい。神鳴。いかづち。はたたがみ。雷鳴。雷神。遠雷。落雷。雷雨。日雷。……二九六
夕立　ゆだち。白雨。夕立雲。夕立風。夕立晴。……二九六
虹　朝虹。夕虹。……二九七
雲海……二九七
夏の月　月涼し。椰子の月。……二九八
朝曇……二九八
日盛……二九八
炎天　油照。……二九八
片蔭　片かげり。夏蔭。……二九九
西日　大西日。西日中。……二九九
朝焼……二九九
夕焼　ゆやけ。……三〇〇
夕凪　朝凪。……三〇〇
旱　旱ばつ。旱天。大旱。……三〇〇
喜雨……三〇一
夏の雨　夏雨。……三〇一
スコール……三〇二
朝靄……三〇二
逃水……三〇二

出水　大出水。……三〇三
夏の湖　夏湖。なつこ。……三〇三
夏の川　夏河原。夏川。……三〇三
夏野　青野。緑の野。……三〇三
青田　青田風。青田波。青田道。……三〇四
夏の山　夏山。……三〇四
滝　瀑布。……三〇四
泉……三〇五
清水　山清水。岩清水。苔清水。草清水。……三〇五
滴り……三〇五
噴井　ふきい。……三〇五
赤潮　苦潮。……三〇五
夏の海　夏海。夏潮。……三〇五
土用波……三〇六
イガポー☆……三〇六
アマゾニア☆……三〇六
赤道☆……三〇六
熱帯☆……三〇七

＝動物＝

＝動物＝……三〇八
上蔟　あがり。……三〇八
繭　繭掻く。新繭。白繭。黄繭。玉繭。繭買。繭売る。繭干す。……三〇八
蚕蛾　蚕の蛾。かいこが。……三〇八
夏蚕……三〇八
袋角……三〇八
根切虫……三〇九
穀象……三〇九
螻蛄　おけら。……三〇九
優曇華……三〇九
亀の子　銭亀。……三〇九
蟹　小蟹。沢蟹。岩蟹。磯蟹。砂蟹。山蟹。川蟹。泥蟹。……三〇九
蝸牛　かたつむり。ででむし。でんでんむし。……三一〇
蛞蝓　なめくじり。なめくじら。……三一〇
蚯蚓……三一〇
蟇　蝦蟇。ひき。……三一〇
雨蛙　枝蛙。青蛙。……三一一
河鹿……三一一
火取虫　灯虫。燈蛾。火蛾。燭蛾。夏虫。……三一一
蛍　蛍狩り。蛍火。初蛍。蛍合戦。米搗蛍。バガルーメ。……三一一
浮巣……三一二
通し鴨　夏鴨。残る鴨。……三一二
夏燕……三一二
燕の子　子燕。親燕。……三一二
蛭　馬蛭。山蛭。……三一三
源五郎……三一三
まいまい　水澄。……三一三
あめんぼう　かわぐも。……三一三
目高……三一三
飛魚　とびお。つばめ魚。……三一三
黒鯛　ちぬ。ちぬ釣。……三一四

鰹　鰹釣。鰹船。……三一四
蠅　蠅を打つ。……三一四
蠅虎　蠅捕蜘蛛。……三一四
蜘蛛……三一四
蜘蛛の囲　蜘蛛の巣。……三一五
蜘蛛の子……三一五
油虫　バラタ。ごきぶり。……三一五
守宮　壁虎。家守。……三一五
蟻　サウーバ。蟻の道。蟻の塔。赤蟻。……三一五
襲撃蟻☆　兵隊蟻。グワジユクワジュ。コレイソン。……三一六
羽蟻　イサー。女王蟻。はねあり。飛蟻。……三一六
蟻地獄　あとずさり。……三一七
蠛蠓　めまとい。糠蚊。……三一七
蚋　ぶゆ。ぶよ。蟆。……三一七
蛆……三一八
マンジューバ☆……三一八
金魚　金魚田。金魚売。……三一八
熱帯魚　闘魚。天使魚。……三一八
チラピア☆……三一九
トライーラ☆　トライロン。……三一九
鯰　バーグレ。雨季鯰。……三一九
ピアバ☆　アラクー。ピアウ。ピアバーラ。……三二〇
ピンタード☆……三二〇
カスクード☆　鎧魚。……三二〇
ピラーニア☆……三二〇
ジアウー☆……三二〇
ピラルクー☆……三二一
電気鰻☆　ポラケー。……三二一
牛魚☆……三二一
夏河豚☆……三二二
クリンバター☆　クリンバ。……三二二
ランバリー☆……三二二
蚊　藪蚊。縞蚊。蚊の声。蚊柱。鳴く蚊。蚊を焼く。……三二二
蚤……三二三
蝙蝠　かわほり。蚊食鳥。……三二三
尺蠖虫　尺蠖。……三二三
夏の蝶……三二四
蛇　鈴蛇。がらがら蛇。カスカベル。……三二四
蛇の衣　蛇の脱殻。蛇衣を脱ぐ。蛇の殻。……三二四
蜥蜴……三二五
道おしえ　はん猫。……三二五
天道虫　てんとうむし。……三二五
金亀子　金亀虫。かなぶん。ぶんぶん。ぶん虫。黄虫。……三二六
髪切虫　天牛。……三二六
甲虫　さいかち虫。……三二六
毛虫　毛虫焼く。……三二六
松蝉　春蝉。……三二六
蝉　アブラ蝉。唖蝉。蝉時雨。初蝉。みんみん。……三二七
空蝉　蝉の殻。蝉の脱殻。……三二七
海月　水母。……三二七
夜光虫……三二七

舟虫……三六
紙魚 雲母虫。衣魚。……三六
落し文……三六
蠍 さそり。……三七
鯛☆……三七
スクリウー☆河大蛇。アナコンダ。……三七
サラクーラ☆……三七
羽脱鳥 羽抜鳥。……三八
仏法僧 木の葉木兎。慈悲心鳥。……三八
駝鳥☆エマ……三八
サビアーの子☆……三八
牛鷺☆ソコ・ボイ。……三八
鉄鳥☆テゾーラ。……三八
タツー☆ タツー・ガリーニア。タツー・ボーラ。アルマジロ。きゅうよ。タツー狩。……三九
なまけもの☆ブレギッサ。アイー。……三九
ガンバー☆袋鼠。放屁鼠。……三九
獣毛を脱ぐ☆……三九

鹿の子 子鹿。親鹿。……三一

植物

青蔦 蔦茂る。……三三
葉柳 夏柳。……三三
新樹……三三
新緑 緑……三三
若葉 谷若葉。里若葉。若葉風。若葉雨。……三三
松落葉 散松葉。……三四
万緑……三四
椰子☆ パルメイラ。青椰子。……三四
ゴムの樹☆……三四
章魚の木☆……三五
榕樹☆ガジュマル。……三五
桐の花……三五
泰山木の花……三五
アカシアの花 ミモーザ。花アカシア。……三六
日傘の樹☆太陽の帽。……三六
夏木立 夏木……三六

茂り……三六
緑蔭 木蔭。……三七
木下闇 下闇。……三七
青葉……三七
花ゴヤバ☆……三七
椰子の花☆……三八
蜜柑の花……三八
朱欒の花……三八
柿の花……三八
石榴の花 花石榴。……三九
栗の花……三九
柿若葉……三九
桑の実 実桑。……三九
枇杷……三九
青葡萄……三九
青柿……四〇
夏蜜柑……四〇
パンの木☆パンの実。……四〇

パルミット☆椰子の芯。……二四〇
カンバラー☆紅薯花。二段葉。……二四一
青珈琲☆……二四一
ビキーの実☆ビキー飯。ビキー酒。……二四一
椰子の実☆ココ。ココの水。……二四一
ジャカ☆……二四二
マンガ☆……二四二
マモン☆パパイア。……二四二
カランボラ☆五れん子。……二四二
マンガーバ☆……二四三
カジュー☆……二四三
バナナ……二四四
メロン 網メロン。マスクメロン。……二四四
アバカシー☆アナナス。風髑。……二四四
苺 草苺。……二四五
馬鈴薯の花 じゃがたらの花。ばれいしょの花。じゃがいもの花。なすびの花。花茄子。……二四五
茄子の花……二四五
蕾の花……二四五

南瓜の花 花南瓜。花アボボラ。……二四五
胡瓜の花……二四六
胡椒の花☆……二四六
棉の花 棉の蕾。……二四六
早苗 玉苗。あまり苗。捨苗。……二四七
麦 大麦。小麦。麦の穂。穂麦。……二四七
蓼……二四七
夏蕨……二四七
筍 たかうな。たかんな。竹の子。……二四七
蕗 蕗の薹。……二四八
玉葱 セボラ。……二四八
夏葱 刻葱。わけ葱。……二四八
夏大根 なつだいこ。……二四八
茗荷の子 茗荷汁。……二四八
蓑の花 あしのはな。……二四九
蘭 蘭草。燈心草。……二四九
牧草☆ぼくそう。……二四九
若竹 今年竹。……二四九

竹の皮脱ぐ 竹の皮散る。……二四九
竹落葉……二四九
ジロー☆ミドリナス。……二五〇
茄子 なす。初茄子。……二五〇
トマテ 番茄。……二五〇
若牛蒡 新ごぼう。走りごぼう。……二五一
新蕗 走り蕗。……二五一
カンブキーラ☆南瓜の芽。……二五一
胡瓜 ベビーノ。……二五一
西瓜 西瓜番。……二五一
瓜 瓜畑。……二五一
時計草☆……二五一
シュシューの花☆……二五一
糸瓜の花 花糸瓜。……二五二
夕顔……二五二
マラクジア☆時計草の実。マラクジア酒。……二五二
棟の花 梅檀の花。おうちの花。……二五二
王冠樹☆グアブルブー。……二五二

鳳凰樹☆ フランボヤン。鳳凰木。鳳凰花。……三五三
ムルングー☆……三五四
花ジャンボ☆……三五四
山梔子の花……三五四
紫陽花 七変化。よひら。……三五四
緋合歓☆ 天使の髪。……三五五
夾竹桃……三五五
クロトン☆ 変葉木。……三五五
ジャスミン 木ソケイ。……三五六
仏桑花 イピスクス。仏桑華。……三五六
浮釣木☆ アブチロン。……三五六
黄金の雨☆ 金の雨。黄金蘭。……三五六
花麒麟……三五六
花ユッカ イトラン。キミガヨラン。……三五七
ブルメリア☆ インドソケイ。ソケイ。……三五七
芭蕉の花……三五七
百日紅……三五七
電信草☆ モンステラ。マドカズラ。蓬莱蕉。……三五八
黄金のうぜん☆ グアラング アラン。……三五八
源平かずら☆ クリストの涙。げんぺいくさぎ。……三五八
蘇鉄の花……三五八
仙人掌 覇王樹。花仙人掌。……三五九
紅孔雀☆ 孔雀仙人掌。……三五九
月下美人☆ 女王花。……三五九
千年蕉☆ ドラセナ。……三六〇
アラマンダ☆ 有明かずら。……三六〇
金雀枝……三六〇
薔薇 そうび。……三六〇
茨の花 野茨の花。花茨。野ばら。……三六一
サルビア 緋衣草。……三六一
飛燕草 千鳥草。……三六一
月見草 待宵草。……三六一
含羞草 ねむりぐさ。もみじあおい。……三六二
紅蜀葵……三六二
風蝶草☆ クレオメ。酔蝶花。……三六二
金魚草……三六二
蚊帳吊草……三六三
百合 山百合。姫百合。鬼百合。白百合。麝子百合。車百合。早百合。黒百合。鉄砲百合。百合の花。……三六三
萱草の花 姫萱草。忘憂草。……三六三
一八 萬尾草。……三六三
忍冬 ニンドウ。……三六四
雛罌粟 ぐ美人草。……三六四
罌粟の花 芥子の花。白げし。けし畑。……三六四
松葉牡丹……三六四
松葉菊……三六五
精霊菊☆……三六五
夏菊……三六五
マルガリーダ☆……三六五
向日葵 日車草。日輪車。……三六六
錦芋☆ カラジューム。……三六六
アマリリス……三六六
アンツリオ☆……三六六

アガパンサス☆ 紫君子蘭。……三六六
極楽鳥花☆ ストレリチア。……三六七
グラジオロ 唐しょうぶ。パルマ。……三六七
月下香☆ アンジエリカ。チューベローズ。夜来香。……三六七
花海芋 コッポ・デ・レイテ。カラー。……三六七
昼顔……三六八
夜顔……三六八
金蓮花☆……三六八
夜光木☆ 夜光花。ダーマ・ダ・ノイテ。夜香木。……三六八
紅丁字☆ 花火の尾。……三六九
釣浮草☆ フクシア。……三六九
蒲……三六九
蒲の穂 蒲の花。……三六九
青芦 よし。あし茂る。……三七〇
河骨 かわほね。……三七〇
布袋草 布袋葵。ミヅヒヤシンソー。……三七〇
藻の花 花藻。……三七〇
睡蓮 黄睡蓮。未草。……三七〇
蓮 はちす。蓮の花。白蓮。紅蓮。蓮池。……三七一
鬼蓮 大鬼蓮。……三七一
水草の花……三七一
萍 あおうきくさ。ひんじも。浮草。根無草。うきぐさの花。……三七一
浅葱 花あやめ。ドイツあやめ。ロシアあやめ。……三七二
菖蒲 あやめぐさ。……三七二
浜昼顔……三七二
浜木綿 はまおもと。……三七二
芭蕉巻葉 玉巻く芭蕉。夏芭蕉。芭蕉玉を……解く。……三七二
岩霧草☆……三七三
ユーカリの花☆……三七三
篠の子 篠の芽。笹筍。笹の子。……三七三
木肌を脱ぐ☆……三七三
病葉……三七四
黴 蚤の香。蚤の宿。蚤けむり。……三七四
木耳……三七四
苔の花 花苔。……三七四
雨季茸☆ ユーカリ茸。……三七四
土用芽……三七五
草いきれ……三七五
夏草……三七五
草茂る……三七五
青芝 夏芝。芝青し。……三七六
サマンバイア☆ 軒忘。釣忘。……三七六
乾燥花☆ センプレ・ビバ。……三七六

人事

夏時間……三七八
墓参 死者の日。慰霊祭。はかまいり。掃苔。展墓。墓洗う。……三七八
流燈 燈籠流し。……三七八
祭……三七九

芭蕉忌 時雨忌。翁忌。桃青忌。……三七九
晩雪忌☆……三七九
文化の日……三七九
共和の日☆……三七九
国旗の日☆……三八〇
一茶忌……三八〇
近松忌……三八〇
桃祭……三八〇
報恩講 御正忌。御七夜。御講。親らん忌。おんこ。……三八〇
海軍の日☆……三八〇
蕪村忌 春星忌。……三八一
更衣……三八一
卒業……三八一
試験 大試験。……三八一
新茶 走り茶。……三八一
夏茶摘……三八二
糸取 糸引。糸取女。糸引女。糸取鍋。繭煮る。糸取歌。……三八二

安居 夏籠。夏行。夏断。夏勤。夏入り。雨安居。……三八二
筍飯……三八二
豆飯……三八二
袋掛……三八二
棉蒔 棉蒔く。棉間引く。……三八三
麦笛……三八三
草笛……三八三
麦刈 麦刈機。……三八四
溝浚え どぶさらえ。……三八四
水見舞 出水見舞。……三八四
豆植う 豆蒔く。……三八四
甘藷植う いもうう。藷插す。……三八五
甘蔗植う☆……三八五
トマテ植う……三八五
陸稲蒔く……三八五
田植 代掻き。早苗開。田植始。……三八五
早苗饗……三八六
誘蛾燈……三八六

虫篝……三八六
草取 除草。除草機。……三八六
川狩 川干。毒流し。沼狩。……三八七
夜振 夜振火。……三八七
夜釣……三八七
蠅除……三八七
蠅帳 蠅入らず。……三八八
蠅叩 蠅打。……三八八
蠅取器 蠅捕紙。蠅取リボン。……三八八
蚊帳 枕蚊帳。母衣蚊帳。……三八八
蚊遣火 蚊遣粉。蚊遣香。蚊取香水。蚊火の宿。……三八八
草矢……三八九
草刈 朝草刈。草刈女。草刈籠。草刈る。……三八九
芝刈 芝刈機。……三八九
干草 草干す。……三九〇
夏服 白服。夏衣。麻服。……三九〇
夏帽子 パナマ帽。ヘルメット。椰子帽子。麦わら帽。……三九〇

夏手袋……三九〇
半ズボン……三九一
夏座布団 椰子座布団 革座布団……三九一
夏布団 夏ぶとん……三九一
籐椅子 籐寝椅子。……三九一
夏暖簾……三九一
夏館……三九二
夏座敷……三九二
夏炉……三九二
夏山家☆……三九二
浮家屋☆ 水上家屋。……三九二
マロンバ☆……三九三
扇 扇子。白扇。古扇。絵扇。……三九三
団扇 絵団扇。古団扇。団扇掛。……三九三
花茣蓙……三九三
吊床 ハンモック。レーデ。……三九四
日除 日覆。……三九四
日傘 砂日傘。パラソル。絵日傘。……三九四

サングラス……三九五
登山 山登。登山宿。登山口。……三九五
キャンプ キャンピング。……三九五
羅……三九五
浴衣……三九五
汗 玉の汗。汗の玉。汗みどろ。汗の香。汗水。汗ばむ。……三九六
レンシーニョ 手ふき。汗ふき。ハンカチ。ハンカチーフ。……三九六
白靴……三九六
竹婦人 竹奴。添寝籠。……三九六
噴水 吹き上げ。……三九七
泉殿……三九七
露台 バランダ。テラス。バルコニー。……三九七
納涼 涼む。涼み台。縁涼み。門涼み。夕涼み。宵涼み。夜涼み。土手涼み。橋涼み。納涼舟。……三九七
端居……三九八
打水 水撒き。水を打つ。……三九八
撒水車 さんすいしゃ。……三九八
タイヤ冷す☆……三九八

行水……三九九
髪洗う 洗い髪。……三九九
牛馬冷す 馬冷す。牛冷す。牛洗う。馬洗う。豚冷す。浸け馬。浸け牛。浸け豚。……三九九
夜店……四〇〇
起し絵 組上。立版古。……四〇〇
夏芝居 草芝居。……四〇〇
夜濯……四〇〇
外寝……四〇一
瓜番 瓜盗人。……四〇一
胡瓜もみ……四〇一
冷し瓜 冷し西瓜。冷しメロン。……四〇一
冷索麺……四〇一
冷しマテ☆ テレレー。……四〇一
氷水 削氷。夏氷。氷店。氷売。……四〇二
冷水……四〇二
ソルベッチ 氷菓子。アイスクリーム。……四〇二
ソーダ水 ソーダ。リモナーダ。サイダー。……四〇二
リモン水……四〇二

グワラナー☆……四〇三
コカコーラ☆……四〇三
砂糖水……四〇三
ガラッパ☆ ゲラヘイロ。……四〇三
ビタミーナ☆……四〇三
タカカ☆ タカカ汁。……四〇三
アサイ☆ アサイ汁。……四〇四
セルベージア 麦酒。黒麦酒。ジョッキ。生ビール。冷しビール。……四〇四
椰子酒☆ トデー。……四〇四
冷酒 バチーダ。冷し大酒。……四〇五
心太 石花菜。……四〇五
冷奴 冷豆腐。……四〇五
干飯 飯干す。……四〇五
飯饐る……四〇五
鮓 圧鮓。握鮓。巻鮓。ちらし。鮓桶。鮓の宿。鮨。……四〇六
夏料理……四〇六
船料理……四〇六
沖膾……四〇六

扇風機……四〇七
冷房……四〇七
風鈴……四〇七
金魚玉 金魚鉢。……四〇七
水盤……四〇七
水樽 コロッテ。……四〇八
箱庭……四〇八
水遊び 水浴。河遊び。……四〇八
水鉄砲……四〇八
水中花……四〇八
花氷 氷柱。……四〇八
冷蔵庫……四〇九
晒井 井戸替。井戸浚。……四〇九
昼寝 午睡。三尺寝。昼寝起。昼寝覚。昼寝人。……四〇九
日向水……四〇九
水番 夜水番。水番小屋。水守る。水盗む。……四一〇
水喧嘩 水論。水争。……四一〇
雨乞 雨の祈。喜雨経。……四一〇

跣足 素足。……四一〇
裸……四一一
日焼……四一一
船遊 遊船。……四一一
ボート……四一二
ヨット ヤッチ。……四一二
水上スキー……四一二
ジャンガーダ☆……四一二
泳ぎ 遊泳。競泳。水泳。遠泳。……四一二
潮浴 海水浴。……四一三
海水着 水着。海水帽。水泳着。……四一三
避暑 避暑地。避暑の宿。避暑の旅。……四一三
嫁選び☆……四一三
夏休……四一四
帰省 帰省子。……四一四
林間学校……四一四
虫干 曝書。土用干。虫払。……四一四
梅干 梅漬。梅干す。干梅。……四一五

土用灸……四一五
暑気払い 暑気下し。……四一五
香水……四一五
天瓜粉……四一五
汗疹 あせぼ。……四一六
水虫……四一六
脚気……四一六
暑気中り 暑さあたり。中暑。……四一六
水中り……四一六
夏痩 夏負。……四一七
寝冷……四一七
赤痢 アメーバ。……四一七
マレイタ ぎやく。おこり。マラリア。……四一七
欠水病……四一八
霍乱……四一八
日射病……四一八
干瓢干す 夕顔剝く。新干瓢。……四一八
鴫焼……四一八

茄子漬 なすびづけ。……四一八
藺刈 藺草刈る。藺干す。……四一九
ガリンポ☆ ダイヤ掘る。ガリンペイロ。……四一九
椰子細工☆……四一九
椰子草履☆……四一九
青田借☆ 青田売。……四一九
事始……四一九
ナタール 聖夜。クリスマス。降誕祭。聖誕祭。聖餐。聖歌。聖樹。パパイノエル。扉飾。店飾。窓飾。街飾。辻飾。ビル飾。パネトネ。ジングルベル。ミサ・デ・ガーロ。……四二〇
プレゼピオ☆ 降誕人形。……四二一
社会鍋 慈善鍋。……四二一
暦売……四二一
古暦 新暦。……四二一
日記買う 日記出づ。日誌。古日記。……四二二
年用意……四二二
年木樵 年木。年木積む。……四二二

年の市……四二二
読納……四二二
事務納……四二二
煤払 煤掃。煤竹。……四二三
歳暮……四二三
年忘 忘年会。……四二三
餅搗……四二三
餅 鏡餅。お重ね。あられ餅。……四二四
掛乞……四二四
掃納……四二四
年越 年越蕎麦。……四二四
年取……四二五
年守る としもる。……四二五
除夜競走☆……四二五
除夜の鐘……四二五

音訓索引……四二六
あとがき……四五九

年始

一月

‖時候‖

一月（いちがつ）

日本では一年を通じて、最も目出たい月とされ「正月」ともいう。一日から七日までを「松の内」といい、都会も農村も仕事を休み、幸先を祝う古い風習があった。それはあたかもそのころが最も寒く、農閑期でもあることに起因すると思われるが、この国は反対に繁忙期であると同時に、クリスト教徒の大祭日「ナタール」の直後に接続するためか「正月」は第二義的で、初日を過ぎれば常日といった感じがある。

中部地方農村では、三月ごろ移植すべきすべての苗床の準備にかかる。また、木蕗、甘藷、甘蕗、馬鈴薯や、早蒔きフェイジョン、ミーリョの蒔付け、珈琲や煙草苗の移植、蔬菜類の苗床造りにもかかる。一方アバカシ、マンガ、西瓜、メロン、雨季フェイジョン、アルファファなどの取り入れもする。虚子に〝一月や去年の日記なお机辺〟の句がある。

新年（しんねん）

年の始（としのはじめ）を普通「新年」と呼んでいる。**新玉の年**（あらたまのとし）・**年改る**・**年立**（としたつ）・**新歳**（しんさい）・**年頭**・**初年**（はつとし）

年迎う・**年明く**などともいう。

新年会　一世料理二世料理　宮崎　花江
年迎う祈の花輪海に投げ　小野　久子
年迎う故国の記憶なき子等と　村上　小鈴
年明けぬ湖は白鷺明りして　栢野　桂山

去年今年（こぞことし）

寺院の除夜の鐘や、新年を祝う打ち上げ花火などに、一夜が明くれば昨日は**去年**（こぞ）であり、今日は**今年**（ことし）である。**旧年**（きゅう

ねん）は去り新しい年の始まることに感慨をこめた言葉。

今年また平凡ならん死なざれば　念　腹
読み返す十大ニュース去年今年　梶本　北民
ツィステー踊って老の去年今年　内山　春一

正月（しょうがつ）

目出度い意をこめた一月の別称であるが、初日から七日までの「松の内」といった気分的な祝いの言葉でもある。

移住地に来て正月の話聞く　念　腹
正月やリオ発つ飛機の老移民　横山　鬼仙
茶摘女と一日限りのお正月　渡辺　志げ女
お正月一子を抱いて移民来し　樋口　玄海児

元朝（がんちょう）

一年の最初の日の朝をいう。**元旦**（がんたん）ともいい、**大旦**（おおあした）ともいう。**歳旦**（さいたん）。

元旦や耶蘇を祭りて墾の家　佐々木　古雪
元旦の海静かにて故国想う　斎藤　瑩石
元旦の大花活にクロトンも　後藤　綾子

元日（がんじつ）

一月一日の呼称。国際祝日。もともと日本で、は旧暦の春季であったが、現在では冬季。ブラジルでは夏季。

元日はスコールもなく暮れにけり　河野　銀生
元日の花圃に起りし蝶吹雪　多胡　一蚪

二日（ふつか）

一月二日のことである。日本では昔から仕事始の吉日とされている。**二日正月**（ふつかしょうがつ）ともいう。

お互に二日の客の笑い皺　念　腹
寄せほぐす牛に二日は雨となり　佐藤　潔子

三ガ日（さんがにち）
一月の一日、二日、三日を「三ガ日」といい

三日正月（みっかしょうがつ）ともいう。
二人住居に何人来しか三が日　近藤　野草

六日（むいか）
一月六日は「サント・レイス」と称し、クリスト降誕に立会った三人の王を祝福する日であるとともに、ナタールや正月の飾物を納めたたむ。**飾納め**。**飾焚く**（かざりたく）。
聖樹たたむ年あらたまる六日かな　岡本　久江

＝天文＝

初明り（はつあかり）
ほのぼのと明からむ元日の明け方の光をいう。

初朝（はつあさ）。
初明り牛の優しき眼が燃える　念　腹
初明り配乳馬車はジョゼの番　織田　糸音
初明りしつつ歩むや牧の牛　佐々木　古雪

初日（はつひ）
一月一日の日の出。**初日の出**はいつの日の出よりも、めでたく神聖なもののように思われる。**初日影**（はつひかげ）。
初日の出掌を見て時計り念　腹
アンデスを出づる初日を拝みけり　後藤　綺郎
初日影椰子花房をたれ連ね　佐藤　いさを
初日の出アサイの屋根と言う嶺に　多胡　一蚪

初日影椰子の扇の金色に　佐藤　桃生
初日影あしかけ九年の椰子壁に　加藤　梅晨
樹海より初日さし入る小店かな　増田　琴香

初空（はつぞら）
一月一日の朝の大空。**初御空**（はつみそら）・**初東雲**（はつしののめ）。**初西**などとも表現される。
初空に泰山木の花白し　丸山　美恵子

初凪（はつなぎ）
一月一日の風穏かに、海の凪ぎわたったさまをいう。
初凪や寝姿正す臥人山　大石　青村

御降（おさがり）
元日または正月の三が日の間に降る雨。めでたい時に降るので慶んでいう言葉。
お降を宿る鳳凰樹の二人　斎藤　信山

＝動物＝

初鶏（はつとり）
元日の黎明に鳴く一番鶏。
初鶏に豚の七ッ子目覚めたり　念　腹
初鶏やミサデガーロの帰り道　岡　半歩
初鶏やほろほろ鳥も鳴きつれて　佐藤　孝子

嫁が君（よめがきみ）
新年の鼠のことで、日本の関西地方の方言から転じて季語となったという。正月の餅などの供えものに来る鼠の食べ具合で、その年の豊作や吉凶を占なった忌言葉。
嫁が君パン粉袋の中に居し　北村　海牛
バナナあれば餅にはつかず嫁が君　松本　吐峰
餅よりもケイジョがお好き嫁が君　橋本　岐陽

═人事═

若水（わかみず）
元旦に汲む水を、日本では目出度いものとして、若水といった。「福茶」は若水で沸かした茶のこと。**若井**（わかい）。
若水の一滴鳥の籠につぎ　上村　静香
若水と言えど大河の濁り水　佐藤　耕雨

乗初（のりぞめ）
船の乗初、車の乗初、或は**初列車**（はつれっしゃ）・**初電車**（はつでんしゃ）・**初飛行**（はつひこう）・**初バス**など、新年はじめて乗る乗物。
東の間のアンデスなりし初飛行　念　腹
ガウーショの晴着乗り込む初列車　村田　米曹
乗初のジープ渦巻く蝶の中　伊藤　通代

初詣（はつもうで）
新年になって神社仏閣にお参りをすることである。熱心なクリスト教徒は地元の守護神を祀った教会やブラジルの守護神を祀ったアパレシーダへ初詣をする。
金貼りし御堂を見んと初詣　念　腹
移民寺の僧と握手や初詣　細梅　鶴孫
ブラジルの尼様は派手初詣　間崎　黎
むつ五郎を二世と食うて初詣　横山　鬼仙
わが村の移民の神社初詣　宮坂　一扉

初ミサ（はつミサ）
除夜の鐘が鳴り終ると、教会では新年の初ミサが修される。
初ミサをさして野路行き町を行く　念　腹
初ミサの僧に従き来し野良の犬　中野　抱葉
初ミサや魚油で固めし寺の壁　田端　月詩
初ミサや金銀の鈴振り交し　今出　均

初ミサに騎馬七人の一家着く　内山　春一

四方拝（しほうはい）
戦前は日本の天長節・紀元節・明治節と共に四大節の一つであった。元旦、天皇宮中神嘉殿に出御され、天地四方並に山陵を拝され、年災を祓い、宝祚の長久を祈らせられる儀式である。ブラジルでもそれにならい、大使館や総領事館、文化団体などが中心となって、今でもこの儀式を行っている。
四方拝どちらを向くも原始林　山本　干柿

年賀（ねんが）
日本では元旦より三ガ日、親戚知人、朋友等相互に訪問しあって、新年の祝辞を述べ合う。

年始（ねんし）**廻礼**（かいれい）。**年礼**。
たてがみを剪りて年賀の馬支度　阿部　月峯
廻礼や大戦前の移民服　白田　涼仙

御慶（ぎょけい）
年賀と同じ語義であるが、御慶というと儀式張った祝詞の感じがある。
簡単な二世の御慶好ましき　和田　ひかり

礼者（れいじゃ）
新年の賀詞を述べる賀客のことをいう。門口で賀礼を述べることを**門礼**（もんれい）、その人を**門礼者**（もんれいじゃ）という。
鞣つけて礼者の馬の寝てをりし　中村　蘇拙
椰子帽の賀客わが家にただ一人　光武　浮流
牧扉まで牛糞掃いて礼者待つ　栢野　桂山
銭を乞う異人の子等も門礼者　中馬　南山
女礼者村の裸子道案内　池田　豊年

年玉（としだま）
新年の贈り物。今では主に子供に与える金銭や物品と思われるようになった。**お年玉**。

年玉の日本菓子とはうれしけれ　野口　童子
年玉にするブラジル蝶送れとて　佐藤　牛童子

賀状（がじょう）

年賀状（ねんがじょう）ともいう。

賀状来し彼の居所地図に知る　念腹
解禁となりし邦字の賀状書く　鈴木　抱春
ブラジルに来たし来たしと賀状来る　西岡　一心
絵葉書のポ語を訳して賀状とす　白井　雨後
米国の信濃村より年賀状　青木　一風
ギヤナ傾近く入植せし賀状　目黒　はるえ
訪日ときまりて賀状あまた書く　岡田　明子
絵葉書はぶらじる丸の古賀状　緒方　紫色

初便（はつだより）

新年になって初めての音信。

牛追うて麻州を発ちし初便り　古川　北光
父母の国讃えて子より初便り　坂倉　きみ子
国訛り書き連ねたる初便り　林　梅露
牛を見に来よとマ州の初便り　白水　里美

初暦（はつごよみ）

新年の暦であるが、大部分は商社の宣伝広告を兼ねたものでフォリーニアと俗に呼ばれている。

初暦さう貰うても仕方なし　多胡　一斜
初暦訪日支度本腰に　佐藤　潔子
初暦ポン屋肉屋に借はなし　木村　南風
荒壁の隙間ふさぎの初暦　浦　紀南子

初竈（はつかまど）

元旦にはじめて竈に火を焚きつけることであるが、今日ではガス竈や電機竈が発達しているので、初めて煮炊きすることをいう。**初焚**（はつだき）。**焚初**（たきぞめ）。

初竈カチカチ山の点火器に　念腹

煙にも虹立つものや初竈　山崎　南泥

寝正月（ねしょうがつ）

正月に無精寝することや、または病気で臥している場合縁起から寝正月という。

八十にして立つべきか寝正月　念腹
訪日ののぞみも遂げて寝正月　風早　南瓜
全身に火酒燃えてをり寝正月　藤井　浪人
寝正月先祖譲りの軸かけて　合田　牧人
日本人母子二人の寝正月　川崎　明子

大服（おおぶく）

元日、若水で茶を煮て、梅干、山椒、結昆布を投じ、一家挙ってこれを服し、賀客にもすすめる日本の古い仕来り。**大福**とも書き、**福茶**（ふくちゃ）ともいう。

大福茶長幼の序に参りけり　間崎　黎

屠蘇（とそ）

白朮・肉桂・防風・山椒・桔梗・赤小豆などを調合した正月に飲む薬酒。邪気を払うという故事によるものであるが、今では正月に飲む普通の祝酒のことをいう。

訪日の事決りたる屠蘇祝う　間崎　黎
十人の八人が二世屠蘇祝う　亀井　杜雁
日本船訪いて戻りし屠蘇気嫌　杉山　一路

年酒（ねんしゅ）

年賀の客にすすめる簡素な祝酒をいう。

お年酒や鰐の刺身と誰か知る　増田　恆河
年酒くむネグロ立飲してかへる　市谷　北見

雑煮（ぞうに）

日本では三が日毎朝餅をあつものにして神仏に供え、一家こぞってこれを食べ、年を祝う。山海さまざまのものを混るので雑煮という。お雑煮のあとでグワラナを頂きぬ　村風子

雑煮食うアロハ姿は誰々ぞ　青山　笙

飾（かざり）
ただ飾といえば正月の飾である。日本では注連飾りを始め、新年を祝う種々の飾付をするが、ブラジルでは殆んど見かけない。農村なども新年の催しにはせいぜい椰子の葉飾位なものである。**お飾**。

移民小屋椰子の飾も目出度けれ　中野　陽水

鏡餅（かがみもち）
日本では床の間や神仏その他に新春の鏡餅を供える。**御鏡・お重ね**（おかさね）ともいう。一かさねは日月に象ったものである。

妻二世子等は三世鏡餅　藤野　椰子
鏡餅航海日誌供えあり　内山　春一

福引（ふくびき）
正月の遊びの一つ。新年宴会の余興や商店などの売出しの宣伝にも用いられているが、本来は餅を引き合って、各自のその年の禍福を占ったことに由来する。それが今日の籤引となった。これを特に新年とするのは、年占の一種であったからとされる。**宝引**。

福引のボルトゲースの意味を問う　石津　蒲峰
福引や老に当りし艶な物　佐々木　古雪

歌留多（かるた）
正月の屋内遊戯。おもに小倉百人一首を指すが、このほかに**歌がるた・いろは歌留多**・花札やトランプなどがある。

かるた会ピンポン台を借りにけり　杉山　一路

雙六（すごろく）
盤上に種々工夫をこらした絵画に、区画や道程などを附し、賽（ダード）を振って前進、上りを競う。児女の正月遊戯。**絵双六**（えすごろく）。

神戸よりすす移民雙六あがりけり　角森　幸子

笑初（わらいぞめ）
新年になって初めて笑うこと。**初笑**（はつわらい）。

腹の子も笑いて居らん初笑　藤野　緑風
初笑帰化手続きの弁護士と　北村　海牛
混血の児の日本語初笑い　稲垣　温村
痩せ土地のメロンの出来や初笑　菅原　一耕

泣初（なきぞめ）
新年になって子供などが初めて泣くことである。**初泣**（はつなき）。

泣初をまねてアララの笑う如　渡部　チエ
泣初や日本映画の悲しさに　津田　静江

初写真（はつじゃしん）
新年の始めに撮る写真のこと。

古稀の師に並んでもらう初写真　佐藤　あきら

掃初（はきぞめ）
日本では元日には福を掃き出すといい、掃くことを一切せず、二日になって初めて新しい箒をとる仕来りがある。**初箒**（はつぼうき）。

掃初や幸せの鈴扉につけて　玉井　邦子
掃初の土喰いにくる家鴨かな　具志堅　志峰
掃初や靴の落せし土少し　中井　秋葉

書初（かきぞめ）
日本の風習。新年になって初めて書や絵をかくことで、多くは二日がその日である。**試筆**（しひつ）。**筆初**（ふではじめ）。**吉書**（きっしょ）。**書始**。

閑文字は能書にてこそ書始　念　腹
毛筆を得し嬉しさの吉書かな　川崎　春芹

捨てがたき毛筆一本筆始　本間　竹馬

読初（よみぞめ）
正月になって初めて好む書を読み始めることである。
画集序のポルチナリー伝読始　吉原　金二郎
整いし書架より抜きて読始む　岡田　南方

仕事始（しごとはじめ）
新年に始めて仕事や事務にかかること。**事務始**（じむはじめ）。**斧始**（おのはじめ）。
雨季の豆買って仲買始めかな　白田　涼仙
このネグロ写真始めのお客とは　宮崎　扶双
東京の本社より来て事務始　青木　偶居
鉄の木のあっけなかりし斧始め　高島　ひさし
扁額は下元翁や事務始め　石橋　初穂
夫婦して交互の斧や伐り始　稲垣　泊蒼

初原稿（はつげんこう）
新年の始めに手をつける原稿のこと。
まだ出来ず初原稿の下書きも　念　腹

初刷（はつずり）
新年になって初めて見る、新聞や雑誌等の初刷をいう。
初刷や葡字紙にもある邦字賀詞　斎藤　信山

鍬始（くわはじめ）
正月二日農家で儀式的に田畑に鍬を使い始めること。**初鍬**（はつぐわ）。**農始**（のうはじめ）。**鋤初**（すきはじめ）。
黒人を使いこなして鍬始　目黒　白水
鍬始笠戸移民の孫として　栢野　桂山
鍬始父子二代の珈琲園　長安　たけを
初鍬に汗のしたたる目出度さよ　鈴木　李青
日雇のネグロ先頭鍬始　山口　忘我

縫初（ぬいぞめ）
新年始めてものを縫い始めること。**初針**（はつばり）。
縫初や昨日休みしわがミシン　太田　幸恵

売初（うりぞめ）
商店など新年になって初めて売ることをいう。**初商**（はつあきない）。**売始め**（うりはじめ）。**初売**（はつうり）などともいう。
ピンガ五ミルは昔の事よ売始め　羽田　爽人
初商乳しぼられて牛きまる　小柳　武義
ビヤジャンテ初商の大鞄　石津　蒲峻
初売や言い値で買うは日本人　星野　瞳

買初（かいぞめ）
新年になって初めてものを買うこと。**初買**（はつがい）。**買始**（かいはじめ）。
すみれ色のブラジル紙幣買始　栢野　花影

初荷（はつに）
日本では商家は正月二日、初荷を賑々しく飾り立て、馬車やトラックなどで送り出す習わしがある。**初荷馬車**。**初荷船**。
初荷積む父子の呼吸の合いにけり　浦　みきえ
小駅より荷馬車につけし初荷かな　木村　南風
一村を廻り一車の初荷かな　長谷川ふみお
初荷つく日本よりの新刊書　今井　せい
セロファン紙かけて初荷のポプリニア　中馬　南山

初湯（はつゆ）
新年始めて沐浴する湯。**初風呂**（はつぶろ）。
ユーカリの青葉を入れし初湯かな　内山　春一
初風呂に孫呼ぶポ語名日本名　加藤　梅晨
初湯出て鶏舎豚舎を一とめぐり　赤尾　白雨

梳初（すきぞめ）
新年はじめて髪をくしけずることである。

梳初やアルパカの皮敷き流し　念　腹
混血の孫の癖毛を梳始　宮田　勢子

初髪（はつがみ）
新年になって始めて結い上げた髪をいう。
初髪にジャスミン差してあどけなし　星野　瞳

初鏡（はつかがみ）
新年になってはじめての化粧に打向う鏡。
老の頬の力抜くべし初鏡　念　腹
だまされて渡伯した顔初鏡　小林　車山
初鏡都に住みて日に焼けて　高島　ひさし

稽古始（けいこはじめ）
新年始めて武術、音曲、生花などの稽古を始めること。**初稽古**（はつげいこ）。
那覇歌の候台詞初稽古　佐藤　夢遷
拓士の鬱衰えみせず初稽古　的野　いさむ
日伯旗かかげて稽古始かな　山田　秀峯

謡初（うたいぞめ）
新年初めて謡をうたうことである。**初謡**（はつうたい）。
二世子等耳塞ぐらん初謡　野村　牧山人

初釜（はつがま）
新年に初めて催す茶の湯をいう。**初茶の湯**（はつちゃのゆ）。**点茶始**（てんちゃはじめ）。**初茶釜**（はつちゃせん）。**初点前**（はつてまえ）。
初釜や一ト日を過す日本着　岡上　浜子

弾初（ひきぞめ）
新年に楽器などを弾きはじめること。**初弾**（はつびき）。
弾初や集り来て踊る異人の娘　増田　紫山

初句会（はつくかい）
新年始めての俳句会。**初吟行**（はつぎんこう）。**吟行始**（ぎんこうはじめ）。
初句会草分移民入門す　念　腹
移住地の乙女ばかりの初句会　西方　美代子
十ミルの汽車で参じぬ初句会　稲垣　温村
ジャラグワの山に吟行始かな　吉川　耕花

初芝居（はつしばい）
新年にもようする植民地の草芝居。
初芝居鍬打込めという意見　念　腹

初夢（はつゆめ）
正月一日の夜から二日の朝にかけて、新年のはじめて見る夢で、めでたい夢を見れば、幸運をさずかるといって喜ぶ。
八十の初夢駆馬で旅立てり　念　腹
初夢や日本の富士にリオの湾　亀井　杜雁

騎初（のりぞめ）
新年になって始めて馬に乗ることである。**騎馬始**（きばはじめ）。**初騎**（はつのり）。**騎始**（のりはじめ）。
騎初を追う子倅の裸馬　念　腹
角笛を吹き鳴らしつつ騎始　酒井　夢窓
初騎や妻はミナスの女鞍　保田　草南
騎初や馬具の古びの甚だし　川崎　明子
騎初や牛にも乗りて見せる者　増田　琴香
騎初や角笛しかと肩に掛け　牧　守夫

弓始（ゆみはじめ）
新年になってはじめて弓を引くことである。**初弓**（はつゆみ）。**的始**（まとはじめ）。**射場始**（いばはじめ）。**弓矢始**（ゆみやはじめ）。**射初**（いぞめ）。
インジオに習いし型で弓始　小滝　土香

初漁（はつりょう）
新年に初めて漁に出ること。**初網**（はつあみ）。**初

釣（はつづり）などともいう。**漁始**（りょうはじめ）。

初漁のドラ一ドなりし誇かな　佐藤　いさを

初旅（はつたび）

新年早々はじめてこころみる旅行。

初旅や未知の句友ら待ち呉るる　津田　静江

破魔弓（はまゆみ）

日本の昔、弓を射て遊ぶ児戯があった。その的を「ハマ」といい、その矢を**はま矢**といった。その後弓矢は男児の初正月の飾物として贈る習慣となったが、今日では厄除のお守りとなっている。

インジオの弓矢破魔矢として飾る　星野　瞳

サント・レイス　＝SANTO REIS

一月六日はクリスト降誕に立会った三人の王を祝う日。**「三王祭」**（さんおうさい）。**「浮れ神」**（うかれがみ）。**「三王囃子」**（さんおうばやし）。

サントレイス唄分らねど迎えたり　猪原　備舟

銭獦むサントレイスは地にまろび　村田　麦仙

浮れ神のせて銀バス町めぐる　白水　唯志

サントレイスポン屋の前を通りすぎ　船山　久美子

秋

二月
三月
四月

‖時候‖

秋（あき）

首都ブラジリアを標準とするブラジルの秋は三月二十日から六月二十一日までとなっている。俳句の上では、二月五日ごろの立秋から五月六日ごろに当る立冬までの三ヵ月間が秋で、その九十日間を**九秋**（きゅうしゅう）といい、初秋・仲秋・晩秋のことを**三秋**（さんしゅう）という。**ホ句の秋。島の秋。野路の秋**（のじのあき）。**窓の秋**（まどのあき）。**秋の宿。秋の人。**

リオ一と日曇るともなき秋の景　念　腹
人住まずなりたる移民小屋の秋　行方　南魚
日本の物なくなりぬ母の秋　吉川　寿楼
パンも焼き豆腐も造り妻の秋　荒木　宗平
仏蘭西の踊り子が来てリオの秋　宮坂　幾別春
酒さげて邦人訪えば島の秋　福井　一仙
ホ句秋やはずんで買いし葡語辞典　大森　とめ女
浜の秋土人教化の寺は寂び　宮野　契城
なまけもの枝を撓めて肥ゆる秋　佐藤　牛童子
音楽の付くミサ付かぬミサの秋　梶本　北民
背負い吹く角笛秋の音を張れる　白水　唯志
良き姑に成らんと学ぶポ語の秋　織田　文月
和書伯書読書の秋の親子かな　中島　孤穂
群牛に馬乗り入るる牧の秋　坂崎　毬藻
混血の曽孫産る老の秋　合田　牧人
移民等も愛国献金国の秋　山田　秀峰
虫の秋松虫鈴虫無き国に　鈴木　李青

立秋（りっしゅう）

この国の立秋は、暦の上では二月五日前後に当る。気候はまだ真夏の暑さであるが、サンパウロの青物市場などには柿その他の果物が出廻り、秋の訪れを感じる。**秋立つ。秋来る。今朝の秋**（けさのあき）。**今日の秋**（きょうのあき）。

口々に今朝ブラジルの秋を言う　念　　腹
百姓の買えて白馬や今朝の秋　上塚　瓢骨
秋来しと砥石におけり去勢刀　笠井　牛涎
ピポカ売り秋立つ風に灯をともし　蓮沼　詩子
摘みし茶の日増しに軽く秋立ちぬ　岡本　久江

二月（にがつ）

ブラジル中部地方の農村は、四月、五月の蒔付に備え、整地がつづき、蔬菜や牧草の種を蒔く。また九月、十月に仕立てたカカオの苗を移植し、砂糖黍、甘藷、フエイジョン、エルビリア、セバーダ、センテイオなども蒔き付ける。一方甘藷、稲、フエイジョン、アルファファ、青ミーリョ、葡萄、梨、アバカシーなどの採取や、新しいカンナ園や牧場などの手入れがつづく。この月の十八日から二十三日までの六日間は「禁酒週間」。世界的に有名なカルナバルの催はこの月が主で、暦により三月になることもある。続く「聖灰祭」もこれに準じて行なわれる。

やせて気の荒き二月の蟹を捕る　内山　春一

初秋（はつあき）

秋のはじめのころ。**新秋**（しんしゅう）ともいう。

初秋や日本船員みな若し　大河内　武骨
初秋や葡萄色なる夜会服　津田　静江

残暑（ざんしょ）

秋になってからの真夏のような暑さをいう。**秋暑し。残る暑さ。**

血を塗って干す投縄や牧残暑　佐藤　桃生
布の如干肉懸けて秋暑し　森谷　登美子
牡山羊のまことに臭き残暑かな　宮崎　陽花
カフエーの補植枯れ次ぐ残暑かな　林　蘭月
カンポスを降りて残暑の町通る　増田　恒河

秋めく（あきめく）

季節的変化に乏しいブラジルの山川草木にも、二月ともなると、なんとなく秋らしくなってゆくのを感じる。

夜な夜なの秋めく南十字星　吉川　耕花
秋めくやシンザの日より雨上り　吉川　喜美子
秋めくやカンバスの松峯の松　川崎　春芹

新涼（しんりょう）

ただ涼しといえば、夏の暑さに対する言葉であるが、「新涼」とは秋に入って初めて感じる涼しさをいう。**秋涼し。秋涼**（しゅうりょう）。

新涼や音立てまじくスープ飲む　念　　腹
新涼を南の窓に迎えけり　亀井　杜雁
新涼や青き軍服青き帽　酒井　信女
新涼や袷取出す新移民　星野　東村
新涼や果汁も牛乳も搾りたて　大熊　星子
新涼の星ちりばめて扇椰子　藤原　健

ベンテビーの声も名残や秋涼し　高津　天蕾
ガジマルの赤き実青き実秋涼し　宮崎　風来坊

三月（さんがつ）

三月の中部地方の農村では、麦、セバーダ、センテイオ、エルビーリア、麻などの植付のための整地を行ない、一方アバカシなどを植付け、早い棉摘みも始まり、稲、煙草、甘藷、アルファファ、アメンドインなどを取入れる地方もある。三月八日は「世界女性の日」、十四日は「伯国詩歌の日」、二十一日は「人種差別思想撤廃運動」の国際日となっている。

雨季上る（うきあがる）

中部地方の**雨季明け**（うきあけ）は大体三月の初旬であるが、北伯地方は地域によって、六月ごろまで雨のつづくこともあり、反対にサンパウロ州以南は旱魃に悩まされることがし

ばしばある。**雨季尽る**（うきつきる）。

雨季あけや地面の黴の大模様　念　　腹
雨季あがる一番バルカ牛積んで　坂倉　けん六
雨季明けの六尺の鞭張りて干す　白水　里美
開墾の雨季も明けしと便り書く　山本　抜天子
雨季明けて久方ぶりの月丸し　浅野　つや
空暗きまで羽蟻翔ち雨季上る　目黒　はるえ
雨季上るシリウスの上の四日月　石塚　雀水

秋の夜（あきのよ）

秋の夜といえば、夜長を連想するように、夜がだんだんと長くなり、特に山野の月は澄み、虫が鳴く。**秋の宵**（あきのよい）は秋の日の暮れたばかりのころ。**夜半の秋**（よわのあき）は更けた秋の夜のことである。

誰うらむ筋なき秋の夜の涙　中山　幸子

夜長（よなが）

実際は冬期の方が夜が長いのであるが、特に残暑も去った四月ごろ、めっきり夜が長くなったように感じられるようだ。**長き夜**。

船夜長似せのダイヤを二ッ買う　念　　腹
到来の日本茶あり夜長宿　岩波　掬二
この国に老いゆくままに夜長酒　吉川　耕花
ポ語知らぬ人等座を立つ夜長かな　吉野　青遊
長き夜の十六ミリの故国かな　津田　静江
苦労せしコロノ話や汽車夜長　斎藤　錦子

秋彼岸（あきひがん）

三月二十二日前後は、昼と夜の時間が等しくなるころで、**秋分**（しゅうぶん）ともいい、仏教では法要が行われ、「春の彼岸」に対し**後の彼岸**（のちのひがん）・**秋彼岸会**（あきひがんえ）などともいう。

聖市の僧アサイの僧や秋彼岸　豊原　咲子
香よき日本線香秋彼岸　藤木　渡月
秋彼岸移民の寺の握り飯　土屋　蕪人

爽やか（さわやか）

秋は万象快適な季節で、爽やかさを覚ゆる。大陸的な乾燥期の中部地方の秋の爽快さは特に定評がある。**さやけし**。

爽やかな鐘に合せて時計巻く　今井　せい

冷やか（ひややか）

冷たいといえば冬になるが、秋になって感じる冷やかさをいう。**秋冷**（しゅうれい）。

冷やかや日本風呂欲る産後妻　山本　振圃
冷やかや椅子にまばらなミサの人　定常　祥月

四月（しがつ）　**仲秋**（ちゅうしゅう）

中部地方の農村では、ところによりラランジア、アバカシ、マンジョカなどを取入れ、又カフェーの採取も始まる。一方アベイア、アルファファ、麻、センテイオ、麦、エルビリアなど前月にひきつづき植付けられ、玉葱の苗床仕立、菜園などの苗の移植にも好適期とされ、霜害予防のための甘蔗園の土寄せも始まる。この月の十四日は、アメリカ記念日＝DIA DA AMERICA として南北アメリカ大陸二十一カ国の共和国がその自主独立と親睦を祝う国際日となっている。

また二十一日はブラジル愛国の志士チラデンテスを祭る大国祭日。

秋の日（あきのひ）

澄み通るような秋日和、又は強い日ざしの秋の太陽の意味にも用いる。**秋日**。**秋の入日**（あきのいりひ）。

鉄十字山極むれば秋日落つ　念　　腹
魚を打つ矢は秋の陽にきらめきて　沢村　白葉
豚屠る人の気づかぬ秋日落つ　高　よし子
秋日落つパンパ芒は穂をはじき　目黒　はるえ

秋の暮（あきのくれ）

秋の夕暮（あきのゆうぐれ）のことである。そのあわただしい、つかの間のたそがれは美しく淋しい。**秋の夕**（あきのゆうべ）。

会うまじき人たずね来ぬ秋の暮　間崎　恵
牧の戸の多き道なり秋の暮　杉崎　風来

うそ寒（うそさむ）

うすら寒く、晩秋になって感じる寒さ。

うそ寒や聞き流さるる妻の愚痴　万城目　菊代

朝寒（あさざむ）

秋も深まるに従い、大陸の気温は日中と朝夕の差は甚しく、朝は特に寒さを感じる。**朝寒し**。

森の雲なくなりしより朝寒し　念　腹
朝寒やはんてん着たる新移民　白石　秋峰
朝寒や珈琲の味審査する　小室　偶志
朝寒の物乞コーヒー欲しと言う　上村　静香
朝寒のシーカラ熱く牛乳ぬるし　三原　春風
朝寒やようやくなれて乳しぼる　小坂　みどり
朝寒にサビアもアヌーも鳴かず飛ぶ　菅原　一耕

夜寒（よさむ）

晩秋の夜の更けるに従い、寒さを感じることである。

夜寒はや外套を着て老移民　念　腹
日雇のネグロ夜寒の火酒に酔い　三浦　啞声
掏こくれし蕎麦粉蕎麦掻して夜寒　木村　圭石
豚の子の去勢終りし夜寒来る　最上　拓馬

身にしむ（みにしむ）

秋もようやく深まり、身にしみて秋冷を感じることである。

木枯の身に入む斧を打ちにけり　念　腹

露寒（つゆさむ）

晩秋のころ、草木の葉末や牧柵の鬼針金などに光る露は、見るからに冷めたく、寒々と感じる。

隣人の騎馬に行合う露寒し　念　腹
露寒し山羊の鬚てう草の径　田端　月詩
豚売って芝生の露を寒がれる　鹿毛　至
露寒や牧扉叩けば馬寄り来　大江　圭流

秋深し（あきふかし）

秋も深まると、天地は秋の気に満ち、その静けさは、人々を思索に、或は物思いに誘う。**深秋**（しんしゅう）。**秋さぶ**。**秋闌ける**（あきたける）。

カーチンガ人家見えつつ秋深し　念　腹
麻州に入る裏道にして秋深し　森川　浙
秋深しラミー刈られし畑ばかり　白田　霞城
強引にコロノ暇とる秋ふかし　間崎　黎
パラナ松描かれてことに秋深し　川崎　春芹
不自由なポ語に旅して秋深し　白川　土子
水蛇の棒流れして秋深し　林　風雲児
塀建たぬ日本人墓地秋深む　林田　春雪

行秋（ゆくあき）

過ぎ去ろうとする秋に対する、わびしさをこめた季語。**秋惜しむ**（あきおしむ）。

落日に秋を惜めば曠野燃ゆ　念　腹
金箔の寺見て古都の秋惜しむ　大熊　星子
夜の船に大河の秋を惜みけり　宮地　耿葉
行く秋や先駆移民も散り果てて　大熊　清流子
行く秋の法会ありけり移民寺　沖田　春陽
行く秋やこの農年もあと三月　橋本　悌一

暮の秋（くれのあき）

四月も末に押しつまった**秋の末**（あきのすえ）をいう。**晩秋**（ばんしゅう）。**暮秋**（ぼしゅう）。**秋果つ**（あきはつ）。**秋の別れ**（あきのわかれ）。

我が病むを人重く見る暮の秋　久保　美佐男
歳時記も秋の終りは淋しかり　小林　美佐枝

＝天文＝

星月夜（ほしづきよ）
月のない、満天に星のきらめく、美しい秋の夜空。**ほしづくよ。星の夜。**

星月夜渡伯決意の夜に似たり　藤井　敏郎
星月夜鰐の鼻面水尾引いて　今川　閑歩
南十字の他は名知らず星月夜　千本木　溟子

天の川（あまのがわ）
日本の七夕祭を連想する天の川はロマンチックでもあるが、ゴヤス高原などに見る雄大な天の川も詩情に富む。ふり仰ぐ頭上を越えて、地平線に沈む大陸の**銀河**（ぎんが）は素晴しい。

銀漢（ぎんかん）。

人の名の移民の町よ天の川　念腹
長汀の浪もとつ国天の川　市毛　暁雪
銀漢や立つ十字星伏す北斗　佐藤　いさを
銀漢や帰国約せし歳も過ぎ　山本　千柿
今日よりは南半球の銀河かな　千本木　溟子
銀漢や陸の灯を恋う移民船　間崎　恵
南米は移民の国や天の川　風早　南瓜
飛機で着く汽車なき町の天の川　目黒　白水
移住地を守る二三戸や天の川　矢田貝　北斗
天の川見に来し孫はポ語ばかり　松本　海猫
父母逝きて故国便り無し天の川　井浦　みさを
銀漢の傾くパルサ夜がな発つ　田中　郡南
日本の姉とも疎音天の川　安達　竹畝

初嵐（はつあらし）
秋のはじめごろに吹く、野分めいた強い風。

鞭あげて馬を返せり初嵐　念腹
珈琲の実を揺すぶって初嵐　風早　南瓜

初嵐パンパスグラスの花飛ばせ　橋本　垂南
牧渡り来る角笛や初嵐　山本　抜天子

稲妻（いなずま）
夏から秋へかけて、地平線や森の上などに走る、雷鳴をともなわない電光のことである。日本の稲妻があって稲が実るという古い伝説から生れた季語。**稲光**（いなびかり）。**稲の殿**（いねのとの）。

稲妻や奥地に向い行く流れ　念　腹
稲妻や耶蘇受難日の雲間より　木本　子雷
芭蕉の兵舎椰子の兵舎と稲妻す　須永　一夢
稲妻やアマゾン支流又支流　大城　大洋
稲妻やシルコの裏の獣小屋　梶本　北民
稲妻やマラジョー島はなお遠く　今出　均
稲妻やミナス連山雲厚く　吉間　大志
稲妻やセルトンの旅終る宿　堀　漂人
稲光ひと雨欲しき秋フエイジョン　吉沢　芳文志
稲妻に撲たれて堕ちし椰子の虫　佰野　桂山

流星（りゅうせい）
宇宙間に浮游している星屑が、地球の大気圏に突入し、火を発して流星となる。多くは途中で燃えつきるが、その地球に落下したものを隕石という。**ながれぼし**。**夜遁星**（よばいぼし）。**星飛ぶ**。

星流る蝕むままの椰子の葉に　念　腹
北斗星の一ツが見ゆる流れ星　田草川　兵馬
飛ぶ星に牧椰子応えたりと見し　畠山　露耕
星墜つる樹海の中のわが墾家　栗原　青雲
女王花は一夜の花よ流れ星　西岡　敏子
故里の便り短し流れ星　山田　はじめ
星飛ぶや日蝕近き土人村　斉藤　信山
流れ星樹海の奥の土人村　寺田　賢水
国境の河幅二キロ流れ星　末田　映丘

野分（のわき）
雨をともなわない秋の強風。野も草も吹き分ける風の意。**野わけ**。

開墾の鍋釜とばす野分かな　内山　春一
珈琲樹に葉からませて野分過ぐ　石塚　雀水
ウルブーの輪をたてなおす野分哉　吉沢　芳文志
他愛なくバナナ樹倒れ野分かな　増田　恆河

三日月（みかづき）
この国の仲秋の三日月は三月二十八日（一九七九年）以後の**新月**（しんげつ）に相当する。**三日の月**（みかのつき）とも読む。

三日月の句碑の心とわれ等かな　念　腹
三日月や木蔭の甘くなる山家　青木　駿浪
三日月や一と間継ぎ足す椰子の小屋　宮崎　怪城
三日月や虚子忌果てたるバス待てば　中野　良友
三日月の立てば棉の値上るとか　田中　翠月

夕月夜（ゆうづきよ）
月のある秋の宵方で、新月から弦月ごろまでの夕月夜は薄暗い。**宵月**（よいづき）。**夕月**。

此の町の夕月夜大エスの像　念　腹
夕月や流人の如く移民棲み　沢村　白葉

露（つゆ）
たんに露といえば秋の季語。**露の袖**・**露の世**・**露の身**などは人生のはかなさをたとえた言葉。**白露**（しらつゆ）。**朝露**。**夕露**。**夜露**。**露時雨**。**露の玉**。**露けし**。**露寒**。**露の秋**。

インジオの蓑借りて身に入む露ぞ　念　腹
露しげき秋の牛追う騎馬ネグロ　飯田　霧江
椰子の露芭蕉を打ってこぼれけり　今本　南雀
園を覆う榕樹の髭の露の玉　大江　圭流
露の棉干して朝餉は畑の中　飯田　層雲
露けしと皮の腰蓑して牧夫　宇江　多右
露はじく労働靴の下ろしたて　吉川　喜美子

露深し蔓で結びし牧扉　山中　清流
露深しとて貸しくれし裸馬　大熊　星子
牛呼べば馬も来るなり露の牧　増田　紫山
日の光したたる如く椰子の露　八木　忘我
牧童の皮腰嚢や露の秋　渡部　パウロ
仙人掌の棘に結びて露一ツ　宮坂　幾別春
庭番は日本人らし芝の露　若松　喜美
千年蕪万年蕪と露時雨　丸山　美恵子
露の窓牛乳二本ポン一ツ　坂崎　毬藻

月（つき）

大気は澄み、空は高く、雲が少ないため、秋の月は清らかで美しい。たんに月といえば**秋の月**をいう。**月白**（つきしろ）は月が出かかり、空の明るくなるさまをいい、**弦月**（げんげつ）は弦のように細まった月である。**月の出**。**月明**（げつめい）。**月の道**。**遅月**（おそづき）。**弓張月**（ゆみはりづき）。**宿の月**（やどのつき）。**庵の月**（いほのつき）。**閨の月**（ねやのつき）。**夜々の月**（よよのつき）。

日雇も天下の職や月の秋　念　腹
網打ってゆれいる月のカノアかな　畠山　露耕
一株の芭蕉の蔭の月の風呂　森　臼郎
奴隷部屋なりし二階の秋の月　酒井　夢窓
月白の丘に一列パラナ松　土屋　福美
月の汐マンゲ林に乗り初めし　佐藤　寒月
インジアの化粧湖とて月明し　宮地　耿葉
蟹採りの舟にマンゲの月あがる　青木　偶居
ふるさとはアリアンサとて月仰ぐ　北村　海牛
牛追やとどろと月の橋鳴らし　佐藤　桃生
月の浜ウルブ一群ずつ座せり　池田　豊年
山駅を囲みて眠る月の山羊　星野　春月
門椰子の葉の立ちさわぎ月隠す　大城　鳴子

待宵（まつよい）

四月十一日（一九七九年）の夜のことで、明日の名

月を待つ宵の意。**小望月**（こもちづき）は十二日の満月に対し、なお満たぬ望月の意。

ボテキンに火酒飲み去るや小望月　念　腹
胡椒樹の影揃えたり小望月　工藤　末敏

名月（めいげつ）

日本でいう名月は陰暦八月十五日の仲秋の月であるが、これに相当するブラジルの名月は四月十二日（一九七九年）の**満月**（まんげつ）で、その月の出は午後六時五十三分（サンパウロ市）であった。日本や中国の旧暦八月の満月のころは、空は澄み、秋草は咲き乱れて露をむすび、虫が鳴き、月を観るに申しぶんのない好季節で、その夜を**十五夜**（じゅうごや）といい、供え物などをして祭る古い風習がある。**明月**（めいげつ）。**望月**（もちづき）。**今日の月**（きょうのつき）。**月今宵**（つきこよい）。**芋名月**（いもめいげつ）。

芋名月移民の国の日本人　池田　豊年
名月の大河をよぎるカノアに帆　田端　月詩
ビオロンはカイピラ口説月まろし　田中　夏子
今日の月雨となりたる街の椰子　藤田　似草
名月やマンジョカ団子フバ団子　林　猫山

良夜（りょうや）

仲秋の月光くまなき夜をいう。

コーヒ干す庭ひろびろと良夜かな　目黒　はるえ
船窓にリオの近づく良夜かな　田草川　兵馬
パラナ松を隣屋敷に良夜かな　宮野　契城
リベイラの橋の良夜に旅帰る　計良　静波
向き合うて移民長屋の良夜かな　鈴木　抱春
放れ山羊散歩顔なる良夜かな　中島　孤穂

無月（むげつ）

名月が雨や霧のために隠れて見えない夜をいう。

飯盛の飯をすすめる無月かな　念　腹

ピポカ屋のカンテラゆらぐ無月哉　石津　蒲峻

雨月（うげつ）

待望の名月が雨のために見られないことを詩的に惜しんだ季語。

日雇の雨月の軒にギター弾く　小柳　武義
牛小屋の軒に山羊倚る雨月かな　波屋　まさる
屋根に来て鳴く水鳥や月の雨　大熊　星子
妃の陵に燃えて雨月の香爐かな　今出　富代

宵闇（よいやみ）

季題の上では仲秋のおそい月の出を待つ心でその月の出るまでの夜の暗さをいう。

宵闇や沼ジンジアーは香をこめて　内山　春一
宵闇に恋のビオロン近づけり　武藤　万瓢

霧（きり）

霧は秋に限らず、春の霞も霧であり夏にも冬にも見られるが、俳句では秋のものときめている。**朝霧。夕霧。夜霧。霧の海。川霧。海霧**（がす）。**濃霧**（のうむ）。**さ霧。霧雨**（きりさめ）。**霧襖**（きりぶすま）。**霧笛**（むてき）。

霧飛ぶや海なく山なき移民の地　念　腹
検疫や霧にとざされ移民船　増田　恆河
カイサラの海霧の港の常夜燈　梶本　北民
牧夫いま牛を刺ししや霧襖　佐藤　潔子
バスの笛霧のバルサを呼びつゞけ　三原　春風
希望峰目前と言う霧笛かな　鈴木　湘南子
森きて七ッの滝の夜霧濃し　青木　偶居
霧の山下り来たりてリオ間近　鏡　たけ子
鷲は翔ちウルブは下りて河洲霧　富岡　耕村
ミサの鐘森こだまして野良は霧　織田　糸音
朝霧やマッタ食い込むカフエー園　宮城　一浪
立飲むや朝霧こむる駅カフエー　鈴木　あきら
霧晴れて河渡り行く牛吠ゆる　門岡　とし子
コロノ等を急がす鐘に霧深し　中川　いさむ

鰯雲（いわしぐも）

秋の空に鯖の斑紋のような、又は魚鱗のような白い雲が波のように現れることがある。古くから日本では、この雲が現われると、鰯の大漁があるというので「鰯雲」と呼ばれ、俳句独特の言葉となった。

鰯雲鍬取って気をとり直し　念　腹
鰯雲漁家に漁舟に日本人　相田　苔ろ
新移民落付かせたし鰯雲　末藤　無苦郎
鰯雲州境に来て旅半ば　梶原　我風
鰯雲寺院の多き耕主町　須永　一夢
鰯雲四方下りに町のルア　栢野　桂山
船見れば日本恋し鰯雲　沢村　白葉
鐘打たぬ耕地となりぬ鰯雲　石塚　雀水

秋晴（あきばれ）

雨季明けの後の晴れた日は勿論のこと、長雨の晴れ間晴れ間はさわやかで、晩秋ともなると爽快な秋日和（あきびより）がつづく。

秋晴や褌干さぬ異人小屋　念　腹
秋晴やラテンの民の草闘牛　佐藤　いさを
秋晴や庭広く飛ぶ干マモナ　林　銀河
秋晴や牛見櫓のある牧場　滝浪　水明
ウルブーの影牧翔けて秋晴る、　野村　渓正
秋晴のバウル路に入る今日虚子忌　梶本　北民
秋晴や町に田舎に蝶吹雪　平野　住代
パラナ松見えそめてより秋晴る、　的野　いさむ

秋高し（あきたかし）

秋の長雨の過ぎた晩秋のころの澄んだ空は特に高く感じる。**天高し。**

天高し櫨の下にも牛放れ　念　腹
馬の屁に大南米の天高し　森　冬葉
天高くウルブは二度と羽ばたかず　片野　音庭
天高し地球の裏と誰が言いし　宮崎　扶双
秋高し種牛に得し金メダル　白水　唯志

角笛はこだまかえさず秋高し　山田　秀峯
優勝杯掛けし大牛天高し　牛田　幸良
天高く国境街の静けさよ　請川　八十音
秋高し大湖を渡る蝶の群　中野　良友
曲りたる角笛上向く天高し　加藤　梅晨

秋の空（あきのそら）

秋の空は変化が激しいが、天候が定まると澄んで美しく、季節を強く感じさせる。**秋天**（しゅうてん）。**秋空**（あきぞら）。

秋天や門柱の如椰子二本　長谷川ふみお
ペローバは力の木なり秋の天　村田　麦仙
秋天下墓ことごとくイエスの子　鈴木　李青

秋の雲（あきのくも）

秋の大空に浮いては流れ、湧いては消え、たえず流動している秋の雲は見ていて飽きない。

秋雲や島の木立の薄き上　念　腹
遠山は原始林なり秋の雲　飯塚　しのぶ
まず見えしモジアナ富士に秋の雲　船山　久美子
秋の雲ブラジルの四季見つけたり　森川　喜十
秋雲に翳るリベイラ富士低き　増田　恆河

秋風（あきかぜ）

大陸的な暴風も野分も秋風であるが、晩秋の風には、ひとしをすさんだわびしさを感じる。主として東南又は南の風。**秋の風**。

秋風に擦れ合う鰐の木肌かな　斉藤　信山
焼捨てる珈琲の匂い秋の風　吉田　松涛
秋風や和語に頼れば生活苦し　浦　紀南子
火酒呑んで落伍者ならず秋の風　藤木　渡月
シュシュ棚の池に傾く秋の風　山本　よし枝
牛車行く馬糞埃や秋の風　榎本　明花
貝塚の貝の白さよ秋の風　今出　均
秋風や耕主の建てし寺は古り　大江　圭流
泣虫の樹の鳴る墓地や秋の風　平野　住代

秋風や張り竹入れて獣皮干す　田中　都南
貝塚に佇つ虚しさや秋の風　梶本　北民

秋の声（あきのこえ）

秋になって風の音、雨の音などが、ものさびしく聞え、せっせっと秋を感じることである。**秋声**（しゅうせい）。

子の墓へ秋の声聞くごとく来ぬ　永島　行人
一人釣る波に乗り来る秋の声　山口　錦水

秋の雨（あきのあめ）

秋の雨は、しとしとと降りつづく。**秋霖**（しゅうりん）や晩秋の時雨めいた冷たく陰気な雨に、その感じが強い。**秋雨**（あきさめ）。**秋黴雨**（あきついり）。

秋雨や葉のはためくが旅人木　大石　喜農
秋霖や銃眼ありて寺暗し　林　貞逸
秋雨や爪病む牛は身をちぢめ　佐々木　古雪
秋雨やグワラナを噛んで留守居婆　丸山　美恵子

後の月（のちのつき）

日本でいう中秋の名月は旧暦八月十五夜の月で、新暦では十月六日（一九七九年）。ブラジルでは四月十二日の満月だった。この名月に対して一カ月後の晩秋の名月を「後の月」または**十三夜**（じゅうさんや）といい、十五夜と同じように供え物をして観賞した。日本の旧暦でいう「後の月」すなわち「九月十三夜」は新暦では十一月四日（一九七九年）となり、サンパウロ付近では五月十一日の満月だった。その月の出は午後五時八分三十秒、満つる時刻はブラジリア標準時午後十一時一分となっていた。**豆名月**（まめめいげつ）・**栗名月**（くりめいげつ）は「後の月」の観月の供え物から生れた季語。

ガリンペイロの草屋々々も十三夜　古沢　典穂

秋時雨（あきしぐれ）
晩秋の一時的な通り雨のことで、ただ「時雨」といえば冬の季語。
秋時雨立ちよるべしや旅人木　宇江　多右
泣き虫の木の枝たわむ秋時雨　宮崎　風来坊
章魚の木の脚の乱れや秋時雨　青木　偶居
珈琲のバレソン急ぐ秋時雨　国吉　秀峯

秋曇（あきぐもり）
残暑のまだ去らぬころ、夏のような高い厚い雲の層に閉された秋の空模様。
秋曇やふぐりの腫るる去勢豚　永島　南岳

秋旱（あきひでり）
中部地方も年によって三、四月ごろから乾燥期に入るが、三ヵ月以上も雨らしい雨の降らないこともある。
芋の葉のしらけ変りぬ秋旱　上塚　飄骨

秋の虹（あきのにじ）
夏の虹ほどは現れない。秋の虹は鮮明度は高いが消えやすい。
痩地にもコーヒー実り秋の虹　念　腹
ゴム採の休む林の秋の虹　高橋　白楊

秋夕立（あきゆうだち）
大陸的な初秋の厳しい残暑のあとにやって来る集中雨。
秋夕立牧草の山頭をつらね　念　腹

秋の夕焼（あきのゆうやけ）
たんに夕焼といえば、夏の季語であるが、雨季が過ぎたころ、北東伯沿岸やゴヤス高原などに、大陸的な変化に富んだ夕焼が見られる。
麻州時間吾等の時間秋夕焼　宮崎　怪城
秋夕焼町の中にも牛放れ　長尾　すえ子

═地理═

秋出水（あきでみず）
ただ「出水」といえば俳句では夏の季語となっているが、秋の長雨や集中豪雨でも、しばしば**洪水**（こうずい）となり、農村や市街地に被害を与える。
秋出水遅れて雨季の雲垂れて　念　腹
秋出水引いて牧牛戻りいし　藤木　渡月
秋出水神の旗のみ残りたる　中川　紫水
廃駅のルッサンビイラ秋出水　古川　深山
流れ来しカノア拾いぬ秋出水　宮地　耿葉
新移民着くガタバラに秋出水　宮本　紀南
北の洪水南の旱なをつづく　三浦　新太郎

花野（はなの）
秋草の咲き乱れた野をいう。海岸線の砂丘に続く荒涼とした花野、奥地高原地帯の夢見るような花野など、それぞれ旅行く人々を楽しませる。
山頂に焼いて花野となるところ　念　腹
花野道ミナス牛車に従いて行く　田草川　兵馬
インジオの帰化村行の花野バス　安部　久住
牛の仔を鞍にだきあげ花野行く　鹿毛　至
丘の上の十字架までの花野径　川崎　春芹
花野茶屋油鳴きする串の肉　目黒　はるえ
教会を花野に建てて街造り　林　銀河
牛群に従きて余儀なし花野バス　増田　恆河
むらさきの花野々々のサナトリオ　羽瀬　記代
花野バス次第に客の鄙び来し　大石　青村

秋の潮（あきのしお）
秋の潮は春の潮のように干満の差が激しいが、夏の潮にくらべて清澄さに特色がある。秋潮。
チジュッカや日暮れてぬくき秋の潮　杉本　三千代
秋汐に乗るを軍艦鳥と見し　藤田　似草

秋の海（あきのうみ）

空は高く澄み、視界はひらけ、美しくさわやかな秋の海も、その一面には一抹の淋しさを感じる。**秋の浪**。**秋の浜**。

秋海のリオ百景は何処何処ぞ　念　腹
絶壁の下に亀浮く秋の海　坂倉　けん六
マンゲ渋流れて秋の海浅し　青木　偶居
マクンバの女群れ入る秋の海　田中　夏子
今もある囚人島や秋の海　宮野　契城

秋の水（あきのみず）

秋の水はよく澄み、冷やかに感じる。**秋水**（しゅうすい）。

秋水や縄煙草積む一とカノア　山中　更生
剃刀草ふれあう音や秋の水　井原　南風子
牛裂きしフアコン洗う秋の水　吉間　大志
秋水やフアーカ握りし土人像　山田　秀峯

水澄（みずすむ）

天候も定まった晩秋の、おだやかな日がつづくころになると、沢や、池などの水は特に澄んで見える。

澄む水に佇てば川音逃ぐるなり　念　腹
牛のせしバルサ映して水澄めり　中島　松山
水澄むや泥をかぶって鰹魚　新津　稚鵬
モンジョロの影杵上げて水澄めり　森田　香也
流れ温泉の澄む色ランバリーの色　佐々木　古雪
洗礼や水澄む岸の聖歌隊　須永　一夢
水澄むやこの沼にして鰐棲むと　藤木　渡月
バナナ舟さす竿浅く水澄めり　羽瀬　記代

秋の山（あきのやま）

大気の澄んだ秋の山は明るく、又近くも見える。アレルイアの黄に燃え、クワレズマの紫粧う秋の山は、美しさの中に一抹の淋しさがある。**秋の嶽**。**山粧う**（やまよそう）。**秋山**。

カーチンガと呼びて秋山遠き原　念　腹
牛追うて犬駈けのぼる山粧う　川崎　春芹

秋の野（あきの）

秋草が乱れ咲き、虫がすだく、露にぬれた秋の野はさわやかである。**秋郊**（しゅうこう）。

煙突の次第に沈む秋野ゆく　佐藤　潔子

秋の湖（あきのみずうみ）

湖には自然湖もあり、人工湖（ダム）もあり、大小様々であるが、澄んで見える深山の秋の湖は特に印象的。**あきのうみ**とも読む。**秋の沼**。

秋の湖山牧にして牛秀で　念　腹
秋の湖岸に四五戸の日本漁夫　佐藤　寒月

秋の川（あきのかわ）

澄み切った空の下に流れる大河や、出水に水かさを増して流れる河など、三秋を通じて流れる川には、それぞれの趣きがある。泳ぎ入りし秋の大河の犬を呼ぶ　念　腹
秋の川黒奴夫婦の渡舟守　木村　圭石
牛船に手かざす娼婦江の秋　大熊　星子
秋の川天竜ほどとみて渡る　勝山　呉泉
仕とめたる猿料理居り秋の川　井戸　紫水
バナナ積む浮桟橋や秋の川　羽瀬　記代

刈田（かりた）

稲刈りを終り、その切り株だけとなった田。

牛の背に刈田のアヌー飛んで来る　猪原　備舟
アレモンの村の刈田の四輪馬車　大熊　星子

穭田（ひつじた）

穭は稲の切株。その穭の萌え出た田。

鷺の水隣る穭田色づけり　念　腹
対岸の穭田ミナス富士をおく　今出　均
麻州路の駝鳥は穭田にも駈け　堀　漂人

秋の田（あきのた）

稔りつつある青い田や黄金色に色づいた田。明るい日ざしと風の中に、ゆたかに波打つ秋の田である。

秋の田や海岸山脈はるかなる　梶本　北民

＝動物＝

蜩（ひぐらし）

普通の蟬よりやや大きく、〈カナカナ、カナカナ〉とかん高いよく通る澄んだ声でなくのでかなかなの名がある。亜熱帯以北では一年を通じて鳴き、緑の多い北伯の街などの晩や日没時はうるさい程である。**日暮し**とも書く。

蜩や鐘も吊さぬ移民寺　山口　忘我
かなかなや湯女とは言うも皆ネグラ　間崎　恵子
かなかなや幹明りして園の椰子　栢野　桂山
蜩や国境兵は早や食事　細梅　鶴孫
かなかなや越さん峠にボテコなく　杉浦　武山
かなかなやボスケの豹の吼ゆる刻　畠山　露耕

秋の蟬（あきのせみ）

単に蟬といえば夏の季語であるが、秋に鳴く蟬を俳句ではかく表現する。同じ蟬の声でも秋に聞く声はさわやかにひびく。**秋蟬**（しゅうせん）。

秋蟬の声影の如道に落つ　念腹
秋蟬や百年と言う珈琲園　多胡　一蚪
秋蟬や移民寺にも参り来し　坂倉　けん六
秋蟬や模型モンジョロ杵打たず　佐藤　孝子
秋蟬や句会に借りし日本間　大野　拓夫
秋蟬や園に古りたる象牙の樹　宮崎　怪城
州有林の中の閑駅秋の蟬　林田　春雪
秋蟬のカフエー畑に日を終る　西条　たまき

虫（むし）

秋鳴く虫の総称。秋を象徴する風物の一つ。

千草にすだくさまざまな虫の音には哀れを感じる。**虫時雨**（むししぐれ）は虫の音の繁きを時雨の音にたとえた季語。**残る虫**は多くの虫が声を消したあと、季節におくれてなお鳴いている虫。**虫の音**（むしのね）。**虫の声**。**虫の秋**。**昼の虫**。**虫の闇**。**虫の宿**。

橋に出づわが来し道の虫の音と　念　腹
虫しぐれ月さし込んで子捨窓　多胡　一斜
インジオの住む駅とかや虫高音　花田　良夜
虫の庵月夜にパンを焼いていし　目黒　はるえ
犬吠ゆるピメンタ村の虫をきく　青木　偶居
虫鳴くや門より日本茶室見え　斎藤　錦子
牛売って休ます牧や昼の虫　国吉　秀峯
移り来てパラナも虫の時雨かな　高谷　長斗
昼の虫啼いて使わぬポン竈　森　臼郎
コロニアは一戸一燈虫更くる　千本木　溟子
虫の秋孤独が好きという移民　大江　圭流

鈴虫（すずむし）

コオロギ科。暗褐色の一・八糎ぐらいの虫。形は西瓜の種子に似て頭が小さく、尻が大きい。日本より取り寄せ飼育されている。

鈴虫の二世パナナを食うて鳴く　佐々木　古雪
鈴虫の三世を飼う娘は二世　間崎　恵子
日本座敷鈴虫の籠ところ得し　岡本　久江

蟋蟀（こおろぎ）

コオロギ科。日本には約四十三種おるといわれるが、ブラジルにも種類は多い。大型のエンマコオロギは〈コロコロリンリン〉と鳴き、小型の**つづれさせ**は〈リーリーリーリー〉と鳴く。種類により鳴き方も種々様々である。**ちゝろ虫**。

こおろぎや土間に据えたる珈琲臼　行方　南魚
ちゝろ啼く鈴虫松虫居らぬ国　出羽　富如意
火酒呑めば子等よりつかずちゝろ虫　新津　稚鵬

椰子壁や昼なおすだくちゝろ虫　渡辺　志げ女
火酒並ぶ煤けし棚やちゝろ鳴く　宮坂　一扈
ちゝろ鳴く北斗の一つ地にかくれ　木村　僚花
こおろぎや漆光りのエスの額　寺田　賢水

蚯蚓鳴く（みみずなく）

「亀鳴く」とか「蓑虫鳴く」などとともに、事実の有無は別として、えたいの知れぬ虫の鳴く音に興趣をそそられて生まれた季語。

サント彫る一心不乱蚯蚓鳴く　大熊　秋楓子
蚯蚓鳴く蚊帳吊って病篤しとか　内山　春一

螻蛄鳴く（けらなく）

直翅目のケラ科。ブラジルの俗称はマカコ。体長三糎ぐらいの泥色をした昆虫。〈ジー〉と淋しい低い声でなき、田畑を荒す害虫。**おけら鳴く**。

螻蛄鳴くや男やもめは貰い風呂　織田　糸音

蓑虫（みのむし）

木の枝や軒下にぶらさがり、風にゆられている鱗翅目蓑蛾科の幼虫。雌が約三千の卵を産んで死ぬると、幼虫は繭即ち蓑をつくりはじめる。口から糸を吐き、葉や枯れ枝をつないでゆき、成長するにしたがい上へ上へと継ぎ足してゆく。昔から**蓑虫鳴く**として季語となっている。

蓑虫の綴るはパラナ松の針　念　腹
蓑虫や泣いては居れぬ移民妻　鈴木　抱春
蓑虫やゴヤバの脱げる皮を着て　杉本　三千代

菜虫（なむし）

大根や菜葉類が、葉をひろげはじめると、色々な小虫がつく。これを取るには、ねば土を箸などの先につけ、それにつけて取る。**菜虫とる**。

菜虫とり蝶群れていて捗らず　中村　宙村

袖口の菜虫をはじき珈琲飲む　織田　糸音

蝗（いなご）ガファニョット＝GAFANHOTO
直翅目のバッタ科。水田や陸稲畑に棲息する。黄緑色または褐色の体長三糎程の昆虫。稲の成熟するころに目だつ害虫。日本では**蝗串**（いなごぐし）といい、焼いて食べる。**蝗取り**。**螽**（いなご）とも書く。

押寄する蝗に汽車も止りけり　富岡　静司
食えと言う山形移民串蝗　服部　一川
ラッタ打ち群蝗を追うコロノ吾　今出　富代

ばった　サルトン＝SALTÃO
直翅目のバッタ科。種類多く、淡緑色の農作物に群れる害虫。**はたはた。きちきちばった。**ばった追う子等に女教師馬で来る　笠原　妙女

蝗螂（とうろう）
ローバ・アデウス＝LOUVA A DEUS　数種類の緑色または褐色で、農作物の害虫を捕食する益虫ともいわれ、闘争本能が強く、昆虫中のギャング。交尾しながら雌が雄を食い殺すことがある。**かまきり。いぼむしり。**
いぼむしりそり返るほど立ち上り　武藤　万飄
葉がくれに獲物ありたる蝗螂かな　高島　ひさし

芋虫（いもむし）
ラガルタ・ベルデ＝LAGARTA VERDE　芋の葉などにいる蝶類の幼虫。緑色が多く、黒や褐色も見かける。
芋虫や移民の孫ら畝に這う　念　腹

放屁虫（へひりむし）
鞘翅目の体長二・五糎ぐらいの黄緑色の虫。さわると悪臭のガスを出す。
畝の砂吹いてもどりし放屁虫　内山　春一
放屁虫逃げ失せたりな南瓜積む　吉沢　芳文志

放屁虫流行の犬のくさめ貌　大城　大洋

秋蚕（あきご）
春蚕、夏蚕に対し、秋に飼う蚕を特に秋蚕と呼ぶ。比較的に上りまでの日数が短い。
軒並に信濃移民や秋蚕飼う　中川　正春
秋蚕飼うアヌー威しの旗立てて　古賀　陽月
とりあえず秋蚕にかかる移民着く　長沢　滋青
牛啼いて牧夫忙しく秋蚕飼う　工藤　桑楡

蜻蛉（とんぼ）リベルラ＝LIBELULA
種類が多い。とんぼの最盛期は夏のようであるが、秋晴れの空に群れ飛ぶ**赤とんぼ**などは印象的。**とんぼう。あきつ。やんま。とんぼつり。**
浜蜻蛉起して干すはジャンガータ　念　腹
蜻蛉や蹤が馭せる山羊車　今出　均
頭に載せし水甕を追う山蜻蛉　織田　路満
手荷物にすがる蜻蛉やバルサ発つ　内山　春一
水跳ねてペスカドールという蜻蛉　田端　月詩
移住地の木造二階とんぼ来る　寺田　賢水
蜻蛉やカノアに乗せて来し柩　藤田　似草
牛寄せしあたりに群れて夕とんぼ　石塚　冬鳥
まま事もジャンタめくなり夕蜻蛉　影山　比浪子
蜻蛉や耕地に入る道しるべ　笹根　宜稲
群牛のほこりしずまる赤蜻蛉　清水　よし女
蜻蛉やガリンペイロの谷の墓地　八巻　耕土

秋の蝶（あきのちょう）
秋に見かけるすべての蝶をいう。熱帯から温帯にわたるブラジル大陸では、四季を通じて見られ、季節的に分類することはむつかしい。作句の上では唯秋の自然の点景や、季節感を加味することによってのみ可能といえよう。
秋蝶。
野の石の割られて久し秋の蝶　念　腹
橋出来てバルサ今無し秋の蝶　風早　南瓜

（文庫編集部より。第一版では日本語に変換する時間的余裕がなく、ここまで画像として収録しました。）

あとがき

この新天地に生くる者が、その大自然の変遷や動植物の生態を探り、人情行事などに多少なりとも関心をもつことは、とりもなおさず、この国を愛することにつながる。そして俳句こそはその自然に親しみ得る理想的な文芸趣味の一つであるともいえる。

この〝ブラジル季寄せ〟は、かねて日伯毎日新聞紙上に連載したものに、更に補遺修正を加え一本にまとめたものである。言うまでもなく俳句作者の便宜を主とし、簡単に適当な季題を探ることを目的としたものであるから、解説は出来るだけ簡潔にまとめ、記述の内容についても、及ばずながら正鵠を期したつもりであるが、なお生兵法の城を脱し得ていないことを了承され、将来の参考のためにも、その誤謬について御教示給われば幸いである。

編集内容は虚子編新歳時記その他より、ブラジルの風土に適合したものを選び、日本移民渡伯以来七十余年にわたり作句に活用されたブラジル季題二百八十余題を含む、千五百九十余題と、作句者八百六十余名による、その例句五千三百余句を採録した。

引用例句は念腹先生の作品を主とし、念腹選になる〝木蔭雑詠選集〟〝ブラジル俳句集〟〝パウリスタ俳句集〟〝パウリスタ俳壇〟並に〝ホトトギス雑詠選集〟などより出来得るかぎりこの国の自然と風土に密着したものを優先採録した。

編集を終って思うことは、ブラジルでのこの種の刊行は、はじめての試みであり、その出来ばえは〝無いよりマシ〟といった程度のものに過ぎないが、将来必ずより完全なブラジルの〝季寄せ〟なり、科学的裏付けのある文学的〝俳句歳時記〟が生れ来るものと確信する。その意において必ずしも無駄な仕事ではなかったかと思う。と共にここに採録した例句は、数万のコロニア俳句作品中の一部分にすぎないが、いづれも〝万葉の防人〟の歌にも比すべき、異邦万里に開拓の斧を振るい、この大自然にいどんだ、一人一人の生の記録であり、コロニアの一面を語る歴史でもある。また俳句ならではの移民大衆の特異な詩集の一つでもあることを誇とし、コロニアの俳人各位と嬉びを共にしたい。

この〝ブラジル季寄せ〟の編纂を手がけてより、ほぼ三カ年の歳月をへて、ようやくこのポケット版を刊行することになったが、これ一重に故念腹先生のご指導と木蔭誌友諸兄姉はじめ、読者各位のご支援の賜であり、特に日伯毎日新聞社のご厚意によることを深謝申し上げる。また刊行編纂に当って、増田恆河兄のご協力並に日伯毎日新聞社職員諸氏のご支援をいただいたことを附記し重ねて謝意を表する次第である。

一九八一年三月

編　者

ブラジル季寄せ
一九八一年三月発行
編者　梶本北民
発行所　日伯毎日新聞社
印刷所　同
聖市グロリア街三三一
郵函＝一五〇六八